教職大学院 Newsletter

特集号

Vol.1 (No.133)

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科　since2008.4　2020.5.2

2019 年度は最終カンファレンスを実施することができませんでした。そこで、修了生、在学生、スタッフそれぞれの思いを載せて、紙上カンファレンスとして２号に分けて特集号をお届けすることになりました。

巻頭言にかえて

最終・再出発カンファレンスの意味

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

研究科長　柳沢　昌一

新型コロナウィルスの猛威に学校も社会も翻弄される中で、教職大学院の重要な節目である再出発のカンファレンスの開催も断念せざるを得なくなりました。現在もなおその趨勢を量りかねている不安定な状況の中で、それぞれの持ち場で年度末の仕事の整理と 4 月からの展開の調整に追われておられることと思います。大学もまたそうした状況にあります。

そのような中で、今回、年度最終カンファレンスに代わる、いわば紙上での全体カンファレンスを提案するに際しては、教職大学院の中で様々な議論がありました。流動的でまたこれまで直面したことのない状況にある中で、文章を寄せていただくことをお願いできるのか。そうした懸念は、事態が進む中で強まっていきましたが、最終的にはそれぞれの状況の許す限りでゆるやかな期限で文章を寄せていただく提案をすることとなりました。

最終・再出発カンファレンスの意味

学位記授与式の後のカンファレンスには、いくつもの意味があります。何よりまず 2 年間・3 年間、実践と省察を重ねながら組織的な学習を支える力を培うという営みを重ねてこられた修了生の皆さんの努力とその成果を教職大学院に関わるメンバー全員で、あらためてその価値を確認し讃え、これからの展開への展望を互いの力にしていくことです。修了生の皆さんが、長期実践研究報告を表し、報告会・ラウンドテーブルにおいてその展開を語らう中でどのように自らの実践をとらえ返されたのか、また長期的な記録とそれをふまえたセッションをどのように感じられたのかを語っていただくこと、言葉にしていただくことも重要な意味の一つであると思っています。そして、そうした長い省察の経験を聴き取る側にとっても、自らの経験をその長い展開に照らして問い返し、自身の今後の取り組みに思考をめぐらす、かけがえのない時間となります。そうした重要なサイクルを、形を代えても、なんとかこの重要

内容

巻頭言にかえて

在学生
- 授業研究・教職専門性開発コース
- ミドルリーダー養成コース
- 学校改革マネジメントコース

修了生
- 授業研究・教職専門性開発コース
- ミドルリーダー養成コース
- 学校改革マネジメントコース

スタッフ

50 音順で掲載しています。
所属は令和元年度のものです。

な節目の時期に位置づけておきたい。そうした思いから今回の提案に至っています。

記録となることの意味

緊急避難のような提案ではありますが、この紙上カンファレンスが文章を通して編まれることは、私たちにとって新しい価値も生み出すことになるのではないかという期待も実はあります。毎年の最終・再出発カンファレンスの全容は通常、記録には残されていません。今回の紙上での取り組みは、もちろん十全の語り合いではありませんが、そこで語られるはずの内容の一端、しかもおそらく重要な一端が記録として編まれることになると思います。10 年を超える教職大学院の展開の中で、重要なカンファレスが記録として顕され、そして長く残るものとして表されることは、教職大学院のこれまでとこれからを繋ぐ重要な環となりうると思います。

より長い実践の展開のために

今回の事態は、私たちの生きる世界が、私たち自身が実感している以上にすでに緊密につながり相互依存している現実をわたしたちに突きつけています。まず短期的に問われるのは危機管理と調整の力ですが、中期的、そしてより根本的には、そうした相互依存する世界、しかも全く経験のない問題状況が次々に生じてくる中で、状況を探り協働の取り組みを生み出していく力が求められることになります。当面の危機に対応し組織的な破綻を避ける対処を進めつつ、世界の現実のなかで社会の主体として協働して働く力を培う学習を実現していく長い企図への歩みを進めていく、粘り強い努力が求められている。そうした意味で私たちの長い教育改革の企図とも深く関わっているとも感じています。

最後に

ともに密度の濃い協働探究を重ね、その苦労とまた喜びを共有してきたメンバーが、新しい持ち場に出発するときに、いつも繰り返している言葉があります。

「私たちが、教育への長い展望を見失わない限り、そこに向けてそれぞれの持ち場で取り組み続ける限り、私たちは、たとえ遠く離れても、いつもともにあり、協働し続けている。」

ラウンドテーブルでそれぞれの仕事を語りあう機会を心待ちにしています。

修了生　授業研究・教職専門性開発コース

（所属はインターシップ校）

教職大学院での学びの日々

福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程　澤崎　俊之

教職大学院での学びの日々は、非常に充実していた。日々のインターシップや週間カンファレンス、合同カンファレンス、ラウンドテーブのどれを思い返しても濃い学びであった。特に、メンターの先生をはじめとする多くの先生方とともに授業について考え続けてきたインターンシップやカンファレンスの学びは、非常に濃かった。「問いとは何か？」、「学びとは何か？」、「社会科の意義とは何か？」と授業を通して考え、学び続けてきた。この学びがなければ、今の私に子どもの思考の流れに沿った授業や探究的な授業をデザインし、実践していく力の素地は身につかなかったに違いない。また、インターンシップ先の子どもたちからも本当に多くのことを学んだ。実際に彼らと関わる中で、教師の目線でも子どもの目線でも子どものことを考えることができるようになり、今自分が教師として目の前の子どもにできることは何か見えてくるようになった。これらの学びは、私のかけがえなのない財産であり、これからの私を支える指針となるだろう。これらの学びから得たことを生かし、様々な実践を通して目の前の子どもたちにしっかりと還元し続けていきたい。

そして、この 2 年間の学びを通して、自らの教職に関する知見と授業に対する考え方や理解等が深ま

ったり、教師としての様々な実践力が高まったりするだけでなく、これまでの自分を支えてきた「粘り強さ」に気付くことができた。自分では、「自分って、そんなに粘り強くないし、心も強くないなあ」と当たり前のように思っていた。しかし、周囲の人々が「あなたには、粘り強さがあるね。」と言葉をかけてくださったり、私の中にある「粘り強さ」を見出し、認めてくださったりすることで、私は次第に「自分って、人から見ると粘り強い方なんだなあ」と実感するようになった。勿論、この粘り強さは自分一人だけで獲得できたわけではない。私と関わっていただいた多くの人々の存在があったからこそ、私の中に粘り強さが身についたのだ。この粘り強さを発揮し、教師として様々な実践に挑戦し続けていきたい。

最後になりますが、これまで私の学びを支えてくださった教職大学院の先生方、インターンシップ先の先生方、ミドルリーダー・マネジメントコースの先生方、ストレートマスターの院生に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。皆様と今度は現場でご一緒させていただく日を楽しみにしております。その際には、また色々とお世話になると思いますが、何卒よろしくお願いいたします。

3 年間で得たものと今後

福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程　竹内　達郎

この大学院での 3 年間、自分が持つ価値観が大分構築されていったのではないかと考えている。入学前は、子どもと関わる機会は限られており、授業づくりや子どもへの指導の多くは、「自分がこれまで受けてきたもの」や、「自分が思い描くイメージ」といったものが基になっていた。しかし、その考えだけでは実際に子どもを相手にした際にうまく発揮されることはなかった。一人ひとり違う子どもに適応していくことは非常に難しいことであった。長期インターンシップの中で実際に長い時間をかけて子どもと関わることで子どもの実態や考えていくことについて深く考えることができた。子どもの躓きや思考について気づくことが出来ると、それに対して先生方がどのように対処しているかについて考えていくことができた。その場の対応だけではなく、子どもの発達段階や長期的な視野を持って子どもへ指導している姿を見ることができ、子どもと関わるための手段や考え方について自分なりに考察することができたのではないかと感じている。この大学院での学びの中で、自分の固定観念を良い意味で打ち崩していくことができた。

そしてその活動を自分なりにどう落とし込むかについても多く経験することができた。子どもの前に立って話す際に気をつけるべきことは何か、授業を行う中で大切にしたいことは何かといったことを自分なりに試行錯誤していく期間をもつことができた。授業実践では、他の先生方の模倣を行ったり参考にしたりしてもうまくいくことは少なかった。自分の基本的な能力と経験の差があるからである。しかし、方法についての知識は多く学ぶことができた。それをどのように生かしていくかが、今後の自分の課題となってくる。自分が目指す授業は大きくは「主体的・対話的で深い学び」ではないかと考えるが、まずは「子どもが活動の中で気づきが生まれる授業」そして「互いの意見を認め合える授業の雰囲気作り」を目指して授業実践を積み重ねていきたい。

学部上がりでそのまま学校現場に入っていたら、他の先生方のやり方をじっくり考察したり自分の活動の視点を構築したりしていく時間はほとんどなかったのではないかと感じる。その機会を 3 年間という長い期間もつことができたことは、今後の自分の自信の源になっていくのではないかと考えている。

また、組織の中の一人としてどのように活動していくかについても考えることができた。会議の参加者全員の納得を得る事を大切にしてきたが、それぞれ個人間で抱える課題や意見をまとめて解決していくことの難しさを感じることが多かった。

その中でも自分は、出来るだけ肯定的に他の意見を捉えながら進めていったが、反論したり新たな切り口で提案したりする手段も必要である事を痛感した。これまでの自分は会議の中でそのような立ち回りをほとんど行ってこなかったが、大学院での企画会議を重ねていく中でそのような立ち回りを経験していくことができた。反論は決して元の意見を全否定するのではなく、理解した上でより良くしていくための意見を示していくような意識でいることが大切になるのではないかと感じた。学校現場でも様々な会議や企画が行われていくが、その中で、しっかり他の意見を聞く中で建設的な意見に努めていくこ

とが必要ではないかと考える。そのためにも、意見する人が持つ思いにまで耳を傾ける意識を大切にしていきたい。

この３年間は、長いようでとても短く感じる期間であった。その中で、様々なことに「気づき」を得ることができた。それはこれまで感じていなかった要素であったり、これまで自分が抱えていた課題や思いを再認識したりと様々であった。そして、その気付きをもとに自分なりに考え方や授業展開を「築く」活動を重ね、春から自分が教師として働くことへの材料づくりを行うことができた。この材料は今後ずっと続けられるかもしれないし、新たにつくり変えられるかもしれない。この３年間のように、今後も様々な気付き、学びを得られるように感覚を鋭く、様々な人と関わりながら自分なりの「信念」を築き上げていきたい。

振り返りと展望

福井市明新小学校　津野　慎平

私は教職大学院での長かった２年間を終え、修了を迎えようとしている。私の中では多くのことを学んだつもりではあるが、その学んだことが「学んだつもり」で終わってしまっていないか心配になってしまう。その「学んだつもり」を無くしていくために学んだことを自分で言語化し、今後に活かしていけるようにしたい。そのために今回は「２年間の振り返りと今後の展望」をテーマとしてニュースレターを書いていきたい。

私は出身大学も福井大学である。福井大学卒業時の私と、そこから教職大学院での２年間を終えた現在の私では、目の前の問題に向かう気持ちが変わったように感じる。それは、ものの捉え方、自分自身の捉え方が大きく変わったからであると私は考えている。インターンシップ先では、支援員の先生によく相談をさせてもらう機会があったのだが、その先生が「津野君は、２年間を通して顔が明るくなったよね」と言って下さるようになった。

福井大学卒業時の私は、欠点を見つける事、改善点を見つける事、批判というよりも否定をすることが、自分にとって考える癖になっていた。授業を見るときも、「ここはもっとこうするべき」「もっとこうしたらよかった」という感想から考える。子どもを見るときも「もっとこれができるとよい」「～ができない」と考えてばかりいた。それは、自分自身を見るときもそうだった。「もっとこれができるといいのに」「～ができていない」「～が上手くいっていない」。物事を否定的に考える癖があったばかりに、捉え方のほとんどが否定から始まっていた。あるとき、先輩と授業について考える機会があり、そのときも私は否定からコメントをし始めていた。そのとき先輩から「じゃあ、津野は何が良いと思うの？」と聞かれ、困ってしまったことがあった。また、否定から始まる捉え方は、目の前の子どもとの関係も段々と信頼を失うようになっていった。これらのことがきっかけとなり、私は今までの考え方の癖に気付き、改めて「自分が何をしたいのか」「自分はどうなっていきたいのか」を考え直した。それは、自分の今まで行ってきた過去の経験から考えなおした。後輩や同期の院生、インターンシップ先や大学院の先生に相談し、言葉を借りながら自分なりの理想を作り直した。その理想については、長期実践報告書に詳しく書いたが、ここでは端的に述べることにする。端的に述べるのであれば、子どもたちのそれぞれの個性を将来に自信を持って活かしてほしい。そのために自分に自信を持ってほしいということである。もっともありがちな理想ではあるが、この理想がはっきりとしていなかったばかりに無為に否定する考え方の癖がついてしまった。自分を振り返りながら出来上がった理想をもとに、インターンシップに臨むと、私は子どもの良さをいかに否定ばかりしていたかに気付けた。否定ばかりでは、理想が分からなくなってしまう。肯定するべきところ、良さ、長所を見つけるのも自分の課題へのアプローチとして必要なことだと気付いた。授業実践を行った際にも、今まで見えてこなかった私自身の良さや改善点も見えるようになった。見えるようになったというよりも、「私がどうしていきたいのか」というように私の実践に対して私自身が主体となって考えるようになった。おかげで、日々のインターンシップやカンファレンスも、少しずつ面白みを感じるようになっていった。

インターンシップやカンファレンスで面白みを感じ始めたところで、大学院の２年間が終わってしまった。これから自分の理想に対する課題を深めていく上で、今回の捉え方の変化はやっとスタートライ

ンに立てたようなものである。この変化がなければ、私は否定する癖に気付くことなく、ただ苦しみ続けていたように思う。ここまで気付かせてくれた、大学院に関わる先生方、インターンシップで出会った先生方、共に学ぶ院生、そして私と関わった子どもたちには本当に感謝したい。これから、新たに教職として現場に立った時には、今回の学んだことを「つもり」ではなく常に根底として生かし続けていきたい。また、その上で様々な方にお世話になったことを忘れないでいきたい。

今まで本当にありがとうございました。

一生実践者として

福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程　日野　晶

今春からついに待ちに待った小学校の教員となる。私が大学を終えて過ごしてきた福井での３年間を終えて１番に思ったことは、私は常に“学び手”であるということである。大学院では子どもの学ぶ環境をどうつくるか、を中心に考えてきた。子どもの学びは連続性を帯びてこそ主体的かつ、深く学びを実感することができるのだろうと考える。しかし、それは子どもだけでなく、私自身もまた「授業作り」、「組織作り」、「学び合い」等に関して考え、自分なりに価値づけていく中で、それらは相互に交わりあいながら学びが展開されていたことに気づくことがきた。

振り返ると、私はこの大学院で「過程（プロセス）を大事にする」ことの価値を見出した。過程を大事にしていない他者とのやりとりは「会話」に過ぎない。背景・過程から語り合う「対話」を行わず、上辺の「会話」を行ってしまうと他者の概念、価値観はわからない。その上、自分の考えを知るにもこれまでを価値付けられないと自分自身の考えの形成も何かわからなくなる。他者を知る、自己を知るために「過程（プロセス）を大事にする」ことは必要不可欠なように思う。この大学院では、自己を知る過程を“省察”と呼んだ。私は“省察”を自分の経験、思ったこと、を顧みて、「自分自身と対話する」ことだと思っている。じっくりとこれまで自己の実践と対話し、分岐を見つける。もちろん、分岐点は過程（プロセス）の繋ぎにすぎない。私自身が省察し、自分の学びを大切にしていきたい。それはこれから出会う子どもたちに対しても同じで、子どもが自ら自分の学びを自覚し、自ら学びの連鎖を展開できるような環境作りをしていきたいと考える。

ある日の合同カンファレンスで同じグループになったＡ先生は、「教師は敷き詰めるレンガの道のレンガの１つと思ってやっている。」ということをおっしゃっていた。私はこのＡ先生の言葉にすごくしっくり来るものがあった。「子ども主体の教育」、それは自分よがりではなく、自分と子どもだけの環境づくりでもなく、レンガ同士、つまり教員同士、保護者、地域との連携を大事にしていきながら子どもの支えとなるレンガ道を作ることが大事であると実感した。この院で学んだことを生かして、試行錯誤を惜しまず一生実践者として頑張っていきたい。

正直、新しい生活、学級、授業、クラス作り、組織の一員となって働くことは不安ばかりであり、今も震えながらキーボードを打っている。だが、“私らしく”を忘れずに、「子どもの学びを支える」ために行動していきたい。それがまた自分にとって学びとなるのだろうと思う。

３年間、様々な関わり、経験をいただけたこと、考える場面をいただけたこと、深く感謝申し上げます。

自分探しの２年間

奈良女子大学附属小学校　藤田　若奈

この２年間は、日々、迷いの連続だった。「こんなとき、どうしたらいいのだろう」と何度も頭を抱えた。けれども、目の前の子どもたちは待ってくれない。教師は、その場で瞬時に判断し、行動に移さなくてはならない。しかし私は、自らの行動に自信が持てず、曖昧な言葉で逃げてばかりだった。「教師としての自分」が弱かったのだ。教師としての、ぶれない軸が自分の中にないものだから、私の行動

もぐらぐらと不安定で、子どもたちにとっては何とも頼りない教師だったと思う。2年を終えた今も、まだまだ自分には足りないものが多いが、2年前とは明らかに違う「自分」を感じることができる。改めて、完成した長期実践報告書を手に取り、ページをめくってみると、この2年間でいかにして「教師としての自分」が作り上げられてきたかに気づかされるのである。

子どもは、かわいい。「先生、遊ぼう」と私の腕をぐいぐいと引っ張ってくれ、それは子どもが好きな私の、とても幸せな時間だった。こんな時間が、ずっと続けばいい。けれども現実は、そのような幸せな時間ばかりではない。落ち込み、傷つき、悩まされる。むしろ、2年間のふり返りとして思い出されるのは、のほほんとした幸せな時間よりも、そちらの方が多いのだ。私を突き動かし、教師として成長させてくれたのは、子どもたちからの厳しい言葉だった。ここでは、私の2年間の成長に欠かせない3つの思い出を紹介したいと思う。

まず1つ目。「先生はいつも言うだけで、助けてくれないじゃないですか。」と言われたことだ。体育の時間、雲梯が苦手な子どもが、登りかけのところで動けずに固まっていた。私は「大丈夫、まずここに手をかけて、足はここに……」と声をかけていた時に、そのように言われた。私はドキリとした。口先だけの支援で、困っている子どもに寄り添うことができていなかった。子どもには、お見通しだったのだ。あの子の言葉から、教師として、そして人間として学ぶことが多い。あれから、様々な場面であの子の言葉を思い出し、私は自らの行動を改めるようになった。

2つ目は、ある女の子から私の言う全てのことに「嫌！」と言われて逃げられるようになったり、ある男の子からは物を投げられ、殴られたりするようになったことだ。私は彼らとの出会いから、支援に対する考え方が大きく変わった。私は、目の前の出来事しか見えていなかった。できていないことを、できるようにさせようと必死だった。そのような姿勢で子どもとかかわるうちに、子どもとの関係は日に日に崩れていった。先生方の助言から、子どもの成長を長い視点で見て、その子の将来のために、今、私にできることは何なのかと考えるようになった。そして、できていないところばかりを切り取って見ていた自分を反省し、子どもの良いところを見つけ、小さなことでも一緒に喜び、褒めることを心掛けるようになった。すると、崩れていた子どもたちとの関係が見る見るうちに変わっていった。子どもの成長のためにどう支援していくか、その大事な視点を、彼らに気づかせてもらった。

3つ目は、私の授業実践を語るうえでは外せない。「国語は、頭が腐る」と子どもに言われたことだ。これはショックだった。二度と、子どもにそのようなことを言わせる授業をしてはならないと心に誓った。子どもがおもしろい授業とはどのようなものか、子どもが生きる授業とはどのようなものか、必死で考え、試行錯誤を繰り返し、メンターの先生の授業から学び取ろうと無我夢中だった。あの子の言葉が、私の授業研究を突き動かす原動力となっているのは間違いない。

厳しい。けれども、この子たちのおかげで今の私がいる。決して忘れられない、大切な思い出だ。教師として自分はどうあるべきか、厳しい言葉も真摯に受け止め、常に向上心を忘れずに、力強く、前に進み続けたいと思う。

仲間から学んだ3年間

福井市中藤小学校　森本　希美

３年間という長かったようなあっという間だったような教職大学院生という学生生活が終わった。タイトルの通り、学び合ってきた仲間がいたからこそ私は３年間で主に２つのことを学び得ることができたと思っている。

１つ目は、木曜カンファレンスからの学びである。最初、連合教職大学院での木曜カンファンスのそれぞれの時間帯が、自分にとってどんな意味を持っているのかわからなかったのを覚えている。「なぜこの時間をしているのだろう？」と思うことも多々あり、言われるままのことをこなしていたこともあったと思う。しかし、インターンシップに行かせてもらうことによって、徐々にそれぞれの時間が全て必要なものであることに気付くことができた。それは、インターンシップにおいて、自分が活動を理解していなければ子どもたちのためにできること

が何かを考えたり、支えることができなかったからである。インターンシップを通して、木曜カンファレンスでの学びがつながり、おもしろさを感じさせてもらうことができたように思っている。また、木曜カンファレンスにおいて学び合う集団を目指して、長い時間をかけて同期たちと計画を立てていた日々は、本当に自分にとって価値のある時間であったと思っている。価値ある学びのために本音で語り合うことができた時間があったからこそ、私は成長することができたと思っている。そして、自分が持っていなかった価値観や考え方を知ることができ、苦手であった自分の考えを発言する大切さも教えてもらったように思っている。

２つ目は、私が連合教職大学院に入学するきっかけとなった「子供たちと教師が作り上げる授業とは何か」という自分の疑問は、今の時点での答えが見つかったことである。それは、教師が主導するのではなく、子どもたちが考えてみたいと思う学習課題を設定し、子どもたちの声をききながらその時間を作り上げることではないかと思っている。そして、そこには集団で学び合う価値がわかる環境を整えていくことも大切であるのではないかと思っている。そのため、１時間１時間子供たちは何を考えたいと思っているのかを教師自身が捉え直す時間を持つことを忘れてはならないと感じている。

私は、これからもこの３年間の学びを生かしていきたいと思っている。本当にこれで正解なのか立ち止まってしまうこともあるかもしれない。しかし、私の中にはこの３年間の価値観が生きていると思っている。立ち止まった時にみんなならどうするかと考え、一歩ずつ進んでいきたいと思っている。

最後になりますが、教職大学院の先生方、院生の方々、本当にありがとうございました。

修了生　ミドルリーダー養成コース

「プログラミング的思考」を今後に生かす

福井市中藤小学校　河上　大機

『…最後に自問自答してみる。結局、「プログラミング的思考」とはいったい何だったんだろう…？

勉強嫌いで本をほとんど読まなかった自分でも、小学生の時、一時夢中になった本がある。それは「ゲームブック」である。ゲームブックは、読者の選択によってストーリーの展開や結末が変わるように作られたゲーム本で、アドベンチャーブックとも呼ばれている。「選択肢１を選んだら〇〇ページへ」「選択肢２を選んだら△△ページへ」というように、ストーリー分岐を読者が選択し、最終的にグッドエンディング（勝利など）やバッドエンディング（敗北など）などのゲームオーバーに行き着く。選択肢によっては、すぐにゲームオーバーを迎えることもある。

当時、ゲームブックの中でも「ルパン三世」シリーズが大好きで、このゲームブックだけは、次から次へとひたすら読み続けた（遊び続けた）。ストーリーの内容こそ今ではもうほとんど覚えていないが、その中でもただ一つ、今でも強烈に覚えているのは、シリーズ何作目かの究極の選択肢、ルパンの相棒に「次元をつれていく」と「五右衛門をつれていく」という選択であった。最初にこの選択肢が出てきたので、自分は子どもなりに迷い、悩んだ。「次元は早撃ちのガンマンで拳銃を持っているから役に立ちそう…」「いや、五右衛門は鋼鉄をも切り裂く斬鉄剣を持っているから、接近戦なら…」「五右衛門はすぐに降りると言って別行動しそうだな…」「次元はクールで格好いいけど…」などと、既習の知識を駆使し想像力を働かせ、予測される事柄やそれに伴う危険性など、子どもなりに一生懸命思考回路を巡らせたものだ。

私は、これがまさに「プログラミング的思考」だと考えている。ある物事に対して、「これをするときっとこうなるだろう」という、予測を立てるために必要な物事の「分解」、「もしもこうなったら困るのでこっちにしよう」という、手順や方法を考え直す「組み換え」、そして、「うまくいかなかった…。どこに問題があったのかもう一度考え直してや

ってみよう」という「改善」。そしてその思考をもとに実行する…。それを繰り返していくことが、私たち人間が生きていく上で大切なことだと考えている。

大人も子どもも、地球上の全ての人たちが、例えば「平和」というプログラムを、それぞれが「プログラミング的思考」を働かせ、「プログラミング」すれば、多種多様の「平和」プログラムが完成するであろう。そしてそれはどれも正しいと思う。しかし、効率が悪いプログラム、同じことを繰り返すプログラム、分岐点がないプログラム、様々なプログラムミスが生じるにせよ、その思考から捉え直すことによって、きっと、すぐにではないにせよ、いつか世界「平和」も実現するかもしれない。…』

これは、自分の長期実践研究報告「プログラミング的思考から捉えるリーダー像」の「結びに代えて」の最後の部分の引用です。

予期せぬ臨時休校、それに伴う活動自粛など、今までの歴史では起こりえなかったような想定外のことが起きた今、自分で「考え（分解して）」「判断し（組み換えて）」「行動する（改善する）」能力、すなわち「プログラミング的思考力」から捉え直し、今後に生かしていくことが大切なのではないかと思っています。また、それが自分に与えられた使命のような気がしてなりません。

勉強嫌いな私でも、２年間、教職大学院で学び、研究を終えることができたのは、教職大学院を勧めて下さった小林真由美先生を始め、教職大学院の先生方、西村美貴穂校長先生、竹林史惠教頭先生、中藤小学校の先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

2年間の振り返りと今後の展望

福井大学教育学部附属義務教育学校　田原　裕

２年前、教職大学院での学びをスタートさせた私には、これからの２年間で取り組みたい実践は明確ではありませんでした。ミドルリーダー養成コースに在籍するのだから、学校の中心で動かしているプロジェクトがなければならないのではないかとか、教師のコミュニティの成長を支えるプロジェクトがなければならないのではないかと考え、常に模索をしていました。「長期実践のテーマが見えない」が、提出するレポートでの決まり文句でした。自分が漠然と日々の業務に当たってきていたのかを実感しました。

大学院では、「長期にわたる実践をとらえ返す…」というフレーズをよく目にしたり聞いたりしました。そのフレーズを見たり聞いたりする度に、自分がやってきた特徴的な実践が見つからずに悩んでいました。一方で、周囲の院生の皆さんには、学校の立ち上げに関わっていらっしゃる方や学校や組織の問題に対してプロジェクトを立ち上げている方、特異なプロジェクトを動かしたり関わっていらっしゃったりする方等、まさに実践者といえるような方々ばかりいらっしゃり、そのことがさらに不安や焦りへとつながっていました。「自分にとっての長期にわたる実践とは何なのか…」それを見つけることが、この２年間の一番の悩みでした。

月間カンファレンスや集中講座、ラウンドテーブルといった学びの場は、次々とやってきました。不安や焦る気持ちはありましたが、その時々で偶然ご一緒する方々と、毎回のテーマに合わせて語りあう時間は、意外にも心地よいものでした。入学当初は、専門的な知識もなければ、幅広い経験や実績もない自分がその場を過ごしていけるのかと心配ばかりでしたが、大学院のスタッフの先生方が上手に話をする機会を設定してくださったり、発言を拾って話題をつなげてくださったりしてくださったおかげで、毎回の学びの時間は楽しく過ごすことができました。とりわけ貴重だったのが、自分の考えていることを語る機会があったことでした。年齢、勤務年数、役職、勤務先やその規模、職種は違えども、さまざまな人たちと対話することが、自分がこれまでやってきたことをとらえ返し、別の角度から考え直す機会となり、見方や考え方が広がっていくことにつながっていきました。「フレームを大きくする」とか「枠組みを転換する」といった大学院のスタッフの先生方がよくおっしゃられていた言葉の意味を、次第に感じ取れるようになっていきました。

大学院では、いくつもの書物を読みました。その都度提出するレポートには大変苦労しましたが、他者の考えに触れることや実践を理論と照らし合わせ

て考えることの大事さを実感できました。赴任先の附属義務教育学校で実践している授業実践や教育活動、教師コミュニティのことを、客観的な視点からとらえることにもつながっていきました。

こうして振り返ってみると、２年間の大学院での学びは、これまで自分が積極的に行ってこなかったことや向き合ってこなかったことに時間を取らせていただいた機会でした。話すこと、聞くこと、読むこと、書くこと。じっくりと腰を据えてそれらに臨むことで、教師が学び続けることの意味、実践を振り返ることから次の実践へとつながったり次の実践への手がかりが定められたりすることに気付くことができました。

さて、長期実践報告では、これまでの教師生活を振り返りながら、今後の保健体育科としての実践の方向性や中堅教諭としての在り方を模索し、書き綴りました。おかげさまで、自分の教員として歩むべき道、学校や教育で求めていきたいことが、少しではありますがとらえることができたと感じています。

最後になりますが、ぎりぎりまでご迷惑をおかけしながらも、温かくご協力ご支援いただいた教職大学院スタッフの先生方、院生の皆様、赴任校の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

2年間の振り返りと今後の展望

福井県立武生高等学校 **辻崎 千尋**

本レポートを執筆している令和２年３月は、私の勤務する高校でも「新型コロナウィルス感染拡大防止による全国一斉休校」の最中である。まさに、予測不可能な社会を生きていることを実感する。生徒も教師も思考せずには生きていけない。私の教職大学院の２年間は、この「思考すること」の大切さを学んだ２年間であった。

私は入学時から「授業改善プロジェクトチームの拡大・継続と高校現代文の授業における思考力の育成」というテーマを持っていた。これといった「正解」があるわけではない。カンファレンスでは、様々な校種で勤務されている院生の先生方から、貴重なアドバイスをいただき、教職大学院のスタッフの先生方から、考えもしなかった質問をされることで、学びは深まっていった。ラウンドテーブルでは、職種は違う方々からも刺激的な話を伺うことができた。とはいえ、チームの活動にせよ、自身の授業にせよ、自分のできることを精一杯するしかできない。H29 年度から授業改善に取り組み、勤務校の先生方には多大なる協力をいただいた。ほぼ毎月１人は自主的に公開授業をしてくださった。教科横断型授業ものべ 19 を数える。化学の実験をオールイングリッシュで行った授業も生まれた。チームの活動を知ってくださった先生方が県外から視察に来てくださった。私の現代文の授業では、１年目は「アウトプット」を中心に、２年目は「授業の振り返り」を中心に「思考の過程を外化する」ことを徹底的に行った。特に２年目は、授業中に解説する時間を減らし、生徒たちに考えさせる指導にシフトしていった。解答よりも思考の過程、方向性、要素を重要視した。生徒たちは自身の思考と葛藤しながら、よくついてきてくれた。そう判断できたのは授業に「振り返り」を導入したからである。何がわかっていて、何がわからないかを整理するためにも、きちんと自分の言葉で書くことは大事だと痛感した。またその「振り返り」から、「学びの深さ」とはどういうことかを私なりに理解できた。生徒の振り返りを通して、この「深い」「深くない」の基準を自分なりに整理できたことは、この１年間の現代文の授業で大きな収穫であった。

深い・・・ア　自分の意見や理解に変化があったことが具体的に説明できている。
イ　問いの解き方の違いが明確に説明できている。
ウ　具体⇔一般がわかっている。
エ　経験や知識、既習事項と絡めることができている。
オ　教科書の本文の内容を論拠として新しい考察ができている。
カ　批判的な読みができている。
キ　自ら関連する書籍を読む、ネットで調べる、校外の他者にインタビューするなどしてテキストから離れて主体的に学んだことがわかる。
ク　授業の内容に関連する内容について、質問という形で自分の理解の変容や気づきを他者に投げかけることができる。

ケ　提示された文章の内容を自分事として捉え、身近な物事に例えて説明ができる。

深くない・・a　具体性に欠けるもの。
b　根拠のない単なる感想にとどまるもの。
c　教科書の本文の内容をそのままなぞったもの。
d　授業者やクラスメートの発言をそのまま書いたもの。
e　間違った読みをしているもの。

これらから、授業者による判断の基準を次のようにまとめた。

深い＝授業を通して、授業者やクラスメートとの関わり、自分の知識や体験、既習事項とのつながりから、自分の思考の変容に気づき、それらを振り返りとして文章にできている。

深くない＝授業中の思考の過程において「気づきがない」、もしくは「気づけていない」ために、自身の思考の変容がわからず、振り返りとしての文章が書けない。

（「学びの深さ」の詳細は、長期実践報告を参照していただきたい。）

今後の展望として、チームとしては授業改善の取り組みは継続しつつ、次のステージに進みたいと思っている。具体的には「カリキュラムマネジメント」の見直しと実践、評価方法である。教科横断型授業が増えてきたこともあり、年度初めにカリキュラムに組み込みたい。もっとも効果的な時期を学校全体で考えたい。また授業改善を進めていく中で、授業者それぞれが「振り返り」や様々な評価方法を実践している。それを整理し、学校全体で共有・実践できるようにシステムを整えていきたい。

しかし、何をするにも１人では難しい。チームのメンバー、学年会、教科会などで話合いを重ね、学校全体で動きたい。この「協働」の大切さについても、教職大学院で学んだことである。多様な価値観を受け入れつつ、授業者それぞれのパフォーマンスが最大限て発揮されるよう、思考し実践していきたい。たとえ失敗しても、省察し何度でも挑戦すればいい。今までもそうやってきたのだから。

すべては、目の前にいる生徒のために。

福井教職大学院での２年間の学び

「楽しい学校・教員コンサルタントSecond」事業主
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校　カリキュラムアドバイザー
前田 健志

正直、教職大学院の生活が、このような形で終わるのは残念でならない。本来なら2020年3月23日(月)、全国各地の同級生たちと、院の修了を喜びあい、2年間の学びを振り返る素晴らしい時間になるはずであった。この無念さは書き残しておきたい。

ただ、コロナ禍が教育にもたらした光の面にも触れておきたい。オンラインの普及である。ZOOMなどオンラインツールを用いた授業やイベント、学びあいなどが急速に普及している。そういったことを考えると、我々院の修了生も、オンラインで集まることは可能である。ただ学校現場はまだまだ慌ただしく、臨機応変な対応を迫られているので、少し落ち着いたら企画したい。オンライン教育の学校現場への普及により、「リアルな学校」の価値の再定義の議論も活発になってきている。「学校とは何か？」「リアルで集まる意義とは？」「リアルとオンラインをどう使い分けていくのか？」そんな根本的な問いが、今教育界に溢れている。まさに探究的な学びが現場に起こっていると言えよう。この火を、問いを、議論を、現場から消したくない。議論し続け、それぞれの現場で仮の答えを出していくことが、子どもたちの学びを保障することになろう。

本題に移りたい。この2年間の教職大学院での学びを振り返ってみると、「他者との対話を通じて自分と対話し、言語化する」というルーティンを繰り返してきた2年間だった。最初の半年くらいは、「対話が物足りない」「なんでこんなに書かなきゃいけないのか？」と本音で言うと感じていた。

まず「対話が物足りない」について詳しく述べると、テーブルのメンバーによって「当たりはずれ」

があると感じていた。しかし、それが自分の勘違いだと、『コミュニティ・オブ・プラクティス』などに触れる中で、徐々に気づいていく。自分自身も場の構成員であり、場で学びあいができるかどうかは、自分自身にも責任がある。自分は場を創っていく一人であって、もし学べる空間を創れていないのであれば、それは自分にも問題がある。そう感じてからは、どうしたら他者の本音や良さを引き出し、それぞれの個性や視点、悩みや課題に対する共感に溢れた学びの場にできるのか、常に考えながらクロスセッションに望むようにした。そうすると、どんなテーブルのメンバーでも、楽しい学びの場になり、自己の学び自身も深まった。この経験は教職大学院の学びの中で、最も貴重なものの１つである。この考え方や姿勢は、学校組織や今のコンサルタントの仕事などすべてのことに当てはまる。受け身ではなく、全ての参加者が場の「創り手」であり、マネジメント的な視点で臨めば、どの場も素晴らしい学びあいの場になる。そう確信できたのは、教職大学院での学びのおかげだ。

次に、「なんでこんなに書かなきゃいけないのか？」という当初の不満について触れていく。もともと書くのが本当に嫌だった。毎月のカンファレンス後のリフレクションも、「なんでこんな宿題あるんや」と思っていた。しかし、少し時間をおいてからのリフレクションを言語化することで、「自分は本当にこれでいいのか？」「自分は本当に何をしたいのか？」「どうしたら目的に向かって前進できるのか？」「ほかにも方法はないのか？」など、言語化する過程において、どんどん問いが溢れ、自己との対話が弾み、今まで見えなかった自分の一面が見えるという経験を何度もしてきた。これを書いている今もそうだ。書くこと、言語化することで、こんなにも学べている、成長できていると感じることができる、ということを痛感した。そう感じられると、書くことに対する抵抗感はグッと下がった。もちろん、今でも最初は乗り気ではない。でも書き出すと楽しくなってくる。教職大学院に来なければ、そんな感覚得られなかっただろう。

また、定期的にその時その時の学びを言語化しておくことによって、あとで振り返ってみてみたときに、新たな学びを生むタネになる。自己の変容を感じるのはもちろんのこと、過去の出来事や感情、学びに新たな価値を生むことができる。新たな価値づけを繰り返すことによって、これから自分が本当はどうしていきたいか、どうしていくべきなのか、の指針がアップデートされる。「今」の自分が「過去」に新たな価値を与えることにより、「未来」を創っていく、と言える。長期実践報告がまさにそんな役割を果たしてくれた。大げさだが、過去の再定義が、「後悔」というものを消してくれた。これからも定期的に言語化していく、書き残していく必要性を、今は強く感じている。

しかし、言語化と一言でいっても、自分のしっくりくる言葉や文章を考えるのは難しいことも多々ある。そんなときに救ってくれるのは他者の言葉だ。様々な人が、様々な考えや解釈をして、自分の言葉や文章で書き残してくれている。それらを踏まえて、自分で咀嚼し、新たなしっくりくる言葉や文章を生み出す。長期実践報告でも、『学習する組織』『プロセス・コンサルテーション』という本に本当に救われた。自分の言語化を進めていくためにも、他者が言語化したものに触れる重要性を、教職大学院では痛感させられた。こんなに分厚い本を今まで読んだことはほとんどなかったが、もはや苦になることはなくなった。

そして最後に、この教職大学院では、かけがえのない同志・仲間・先生方にたくさん出会えた。これが最大の財産であろう。この２年間の学びを社会に還元していくために、2020 年度以降も邁進していきたい。

2年間を振り返って

高浜町立青郷小学校 **松本 亜耶子**

ちょうど２年前の４月、不安いっぱいの中、高浜町から福井市へと約２時間半、車を走らせていた。大学院に入る前は、カンファレンス、ラウンドテーブル等カタカナの言葉をよく聞き、それが何を意味するのか分からず、不安に思っていた。また、実践のテーマが決まっていない、長期実践報告を本当に書き上げることができるのだろうか、という思いもあった。

４月の月間カンファレンスの感想を見返してみると、以下のようにレポートに書いていた。

最後に、近隣の学校の先生方と２日間の学びを共有し、今後の実践について話をした。まだ自分は研究実践内容を決められていなかったが、先生方との話し合いの中でいくつかの視点をもらうことができた。いずれにしろ、自分ひとりで行う実践になってはいけない。学校のスクールプランを基に方向性を確認し、学校の先生方から学び、協働しながら行っていける実践は何かをこのゴールデンウィーク後半に考えていきたい。

２日間いろんなバックグラウンドをお持ちの先生方と話をすることができた。それ自体が貴重なことで多くの学びを得た。いろんなお話を聞き、自分のことも話しこれからもがんばろうという気持ちになれたことが大きな収穫であった。

カンファレンスは対話の時間だった。校種も地域も様々な方々と、いろいろな話題について語る。私は教員でありながら、語ることがあまり得意ではなかった。話し出す前は緊張するし、何を話そうと迷う。話し始めても、自信がないからか話があちこち行き、迷走する。最初は大学院でもこんな感じだった。そのうち、自分が話すことにばかりに気がいっていることに気付いた。他の先生方の話を聴くというところに意識が向いていなかった。まず、相手を知ろう、理解しようとするところから対話は始まるのだと、この大学院で学ぶことができた。

また、他校に訪問させていただいて学んだこともあった。県外の学校で授業を参観させてもらい、自身の長期実践報告のテーマである主体的・対話的で深い学びについて考える機会となった。

私が教職大学院に来ることができて一番よかったことは、校種、年齢、教科、地域を問わず様々な先生方と出会えたことである。多様な考えや意見を知り、自分の世界を広げることができた。また、以前同じ職場で働いた先生方と再び会うことができ、旧交を温めることもできた。長期実践報告作成真っ只中の年末年始には、お互いに「進みましたかぁ？」と話しながらパソコンに向かい文字を打つ日々だった。そんな時も、一人じゃないと思えたことは、大変ありがたかった。最後に卒業式でお一人お一人とお話できずに終わったことは大変残念だったが、この状況下では仕方がないことである。

コロナウイルスによる臨時休校に伴い、学校現場では今までの働き方を見直す機会となっている。この業務が本当に必要なのかをもう一度考え直してみる。その本質や目的を見極めることが求められているような気がする。いつもはバタバタと余裕なく過ぎていく三月に、落ち着いて仕事を進めることができた。教員が少しの余裕をもって俯瞰して物事を見られたら、新たな視点に気づき、状況は変わっていくかもしれないと本当に感じる日々だった。この場をお借りして、お世話になった方々に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

Lesson Study and my Professional Experiences: The importance of active learning and inquiry-based learning

Teacher Training Student (MEXT Scholarship) **Ana Lucia Arrecis**

After undergoing the teacher training program under the supervision of the University of Fukui, I gained a lot of knowledge beyond my expectations. At the beginning of this program, I heard a lot about inquiry and reflective learning but thought it was challenging to implement in a Guatemalan school. After completing this program, I was proven wrong, and I learned how to implement it in my classroom using the proper tools and steps.

My learning experience started by observing lessons, and this helped me understand inquiry and reflective learning in a real classroom environment. The lessons I observed in The University of Fukui Attached Compulsory Education School, “Fuzoku,” actively engaged learners in the learning process and teachers provided opportunities for the students to learn from each other. In Fuzoku, active learning is visible in every subject and grade. In the school, the culture of autonomy, collaboration, and contribution is promoted, hence the students are the center of the learning. This approach in Fuzoku is palpable because every activity is designed to improve every child’s learning story.

Another characteristic that I was able to observe and called my attention was the inquiry-based learning.

Reflective thinking can significantly help to learn as it is an active, persistent, and careful examination of all beliefs or supposed forms of knowledge in light of the fundamentals that support it and the conclusions to which it tends. Reflective thinking pursues an objective and that objective imposes a task that controls and organizes the sequence of ideas. If the learning is carried out based on an experience and there is a reflective thought, this learning will be more significant since the subject will organize his/her ideas and each one of them will lead him/her to find temporary conclusions of the lived experience and will make him/her reflect on the possible solutions to the situation that was experienced. Reflective thinking can be perceived in every activity performed by the students and every task created by the teacher. For example, after every lesson, students are asked to write a short reflection on the lesson they just had like what they liked, what was difficult for them or what was new for them. Afterward, these reflections can be considered as an assessment.

Inquiry-based learning, like child-centered learning, also promotes collaboration, lifelong learning, active student participation and it helps students be responsible in their own learning.

This experience provided me with an immense amount of new knowledge, but these two, previously mentioned, are some things that I can implement in my classroom once I go back while I work others my the rest of my peers, which will take more time. These approaches might not be new terms, but they have never been implemented in Elementary level in the school where I work.

One of the greatest learning I obtained was that lesson study should not focus on trying to find what is wrong with the teaching technique of teachers but to find a way, together with others, to develop a learning design that will enhance students' learning and the professional growth of teachers.

After this Teacher Training Program and a lot of reflections and readings, I had to analyze what this practice means to my future practice. I have noticed that my idea of my future practice has been evolving with every new learning experience (school visits, class observations, roundtables, intensive learning courses, JICA co-creation programs, readings, discussions with professors, and symposiums). After analyzing my own practice and comparing it with other practices and what I have experienced here, I know I have a long way to go, but I have also learned that it is possible.

修了生　学校改革マネジメントコース

福井大学連合教職大学院での2年間の学びを振り返って

美浜町立美浜中学校　織田　恭直

福井大学連合教職大学院での２年間の学びを振り返ると、学びの柱となる取組は「カンファレンス」と「長期実践記録」であることが明らかである。「カンファレンス」で「語る」こと、「傾聴する」こと、「長期実践記録」を「読む」こと、そして「書く」ことが、私の中での学びを形成していった。

私にとっては２回目の大学院での研修である。１回目は、平成 15 年度からの２年間であった。その中で堀川小学校や伊那小学校の総合的な学習の時間の長期実践記録に触れた。その物語的な記録は、実際に長い教育の営みの中に関わっているかのような錯覚を覚えるものであった。その記録には、アウトサイダーの視点で批判的に読むというよりは、インサイダー、同じ実践者としての視点で読む姿勢を自然と促されたように思う。それまでは、研究会などで他校の実践を参観させていただくとき、実際に目にした１時間の授業を自分の「ものさし」に当てはめて、その良し悪しを判断するようなところがあった。しかし、堀川や伊那の長期実践記録を読む中

で、果たしてそれでよいのだろうかという疑問を持つことになった。物語的に書かれたそれらの記録からは、子どもと教師、そして保護者の息づかいまでもが感じられるようであった。１年間、またそれ以上の長い期間にわたって脈々とつながっていく実践、それらはわずか１時間で切り取られた授業で判断できるようなものではなかった。公開された授業は決して特別なものではなく、その前にも後にもつながりがあった。そうした長期にわたる実践の文脈の中で実践を捉え直さなければ、その１時間の授業の位置づけを判断することは不可能であった。子どもの発言、教師の働きかけ、それらにはすべて必然ともいえるつながりがあり、それを長期実践記録によって読み解いていく楽しさを感じることができた。

当時のこうした学びの体験は、正しいか間違っているか、成功か失敗かといった対立軸で考えることがくせのようになってしまっていた自分の「ものさし」を見直すきっかけとなった。「短いものさし」は扱いやすいが、「長いものさし」は扱うのが難しい。しかし、「長いものさし」を意識して使わなければ、長期的な教育の営みを読み解くことはできない。

２回目の研修となった平成 30 年度からの２年間の研修は、１回目とは違った学びの体験となった。しかし、１回目の研修で学んだことは確実に今回にもつながっていた。

毎回のカンファレンスでは、６階でエレベーターを降りて会場に向かう廊下で、その日の活動を考えながら適度な緊張感を感じていた。会場へ入るとどのようなグループ編成になっているのかを確認し、少しわくわくするような気持ちで席に着いていた。いつもと違う環境の枠組みに身を置くことは、自分自身の中でいつもはそれほど意識していないチャンネルを開けることとなる。自分自身の実践を振り返り、それを言語化しようと、そしてそれを他者にどのように伝えようかと、思考を巡らしている自分を強く認識することになる。そのたびに、自分自身と向き合って今まで取り組んできた実践を言語化する作業の難しさと大切さを感じることになった。

連合教職大学院での学びは、他者から何かを教えてもらうインプット中心の学びではない。すでに自分の内にあるものを、どのような文脈の中に位置付けてアウトプットするか、それが最も大切であった。同時に、他者がアウトプットしたものを同じ教育の実践者として自分自身の実践の中に位置づけて捉える営みの中で、自分自身の実践を捉え直すことが大切であった。特に「傾聴する」行いの中では、今語られている実践の背後にはどのような思いがあるのか、それを意識して聞くことが大切だった。語っている人の思いに寄り添いながら聞くことで、語られている実践のつながりが見えてくることがある。それは、自分自身の実践のつながりに気がつくことと同義であった。

毎回、こうした気づきがあることがカンファレンスのよさである。自分の実践に対する個人的な思いで凝り固まっていたものが、柔らかくなることを感じる瞬間である。連合教職大学院での学びは、現場とつながっていることを強く実感する。気づきから得た学びは、勤務校での実践につながるものとなる。

２回目となる研修を終え、今自信に満ち溢れた自分が存在しているかといえばそうとは言い切れない。迷いや不安を感じながらの日々である。一つの物事に、多様な矢印を向けて考えるようになっている。研修で獲得した新たな視点が、迷いや不安を生み出している原因でもあると感じている。こうした視点を身につけたことは、どのような意味を持つのか。これから先の教師生活の文脈の中に位置付けて捉え直すことができるようになった時に、見えてくるのかもしれない。

教職大学院での2年間を振り返って

福井市六条小学校　寺前　公恵

先日、私が担任している 13 名の６年生が巣立っていきました。今年は新型コロナウィルスの関係で、例年にない雰囲気でしたが、それはそれで、いつになく感動しました。全く練習をしていない子供達が、立派な態度を見せてくれました。終わってみれば、職場の先生方に「練習、本当にしてないんか？すごいね」と言っていただきました。子供達が、これまで、１年生から５年生まで、５回、先輩達の卒業式を見てきていることや、大変な状況だからこそ、どうすればいいか五感を働かせて頑張って

いることが、立派な式につながったのだと思います。卒業式を本当に楽しみにしていた子供達。そして、保護者の方々。最後の退場では、連合音楽会で歌った「ふるさと」の音楽にあわせて、堂々と歩いて行きました。かみしめてゆっくり歩くＭ児。にこにこと笑顔でまっすぐ前を向いて歩くＫ児。教師冥利に尽きる一日となりました。短い時間の卒業式でしたが、今後、子供達の心に残っていってくれるものと願わずにはいられません。これは、私の長期実践報告「共に育つ」の第３章、４章に登場する子供達の卒業の様子です。

どんな状況にも対応できる力。その力を発揮する場はもうすでにせまってきています。人工知能（AI）だけではなく、自然災害や感染症など、思わぬ事態に遭遇した時、自分が何をすべきかを考え行動できる力が子供にも大人にも必要です。私は、この２年間、福井大学教職大学院で学ばせていただきました。社会がめまぐるしく変化していく中で、子供達が、将来、どんな状況でも対応できる力を育てていくための学校のあり方について、この２年間探ってきました。私が特に注目したのは、新学習指導要領の中で中核として位置付けられた総合的な学習の時間（以下、総合）です。総合は、新学習指導要領のキーワードである「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」とも深く関わっています。総合で培った資質・能力が他教科に波及し、教科横断的な実践の中で深く学ぶ姿につながり、子供達の社会性を育んでいきます。そのプロセスを具体的に表したものが、長期実践報告である「共に育つ」（子供とそれを取り巻く環境の変容）です。書き綴ってみると「深く学び合うコミュニティ」は、「子供の育ち」「教師の育ち」「保護者や地域の方の育ち」が全て相互に絡み合い、それぞれが共にゆるやかに育っているということがわかってきました。それぞれのストーリーを丁寧に書き出した結果、見えてきたことです。マネジメントの視点でいえば、短期的に取り組むのではなく、教職員一人一人が興味をもち、自分事として深く学んでいく学校文化を長期的に創り上げていくことが学校づくりの面では効果的であることもわかってきました。大学院で、様々な先生方と語り合い、多くの書物を読んだことで、理論や新学習指導要領の言葉が確かな実感として自分の中に生まれ、大変勉強になりました。「書く」→「書物を読む」→「捉え直す」→「書く」というサイクル。「書く」→「語り合う」→「新たな考えをもつ」→「書く」というサイクル。「書く」→「読み手の先生方に質問していただく」→「捉え直す」→「書く」というサイクル。同じストーリーを、多くの視点で多面的に捉え直すことは、私にとって充実した時間となりました。子供達に『深い学び』の実現を図るために、様々な対象（人・もの・こと）や過去の経験とつなげて関連付けながら自分自身の変容を自覚できる姿を目指していくことを、正に、私自身が行ってきた２年間だったと思えています。

教師生活 30 年目にして、教職大学院で学ばせていただいたことは、大変意義深いことでした。立ち止まって考えることができました。大学院の先生方との出会い、仲間達との出会い、多くの書物との出会い、職場の先生方の支え、そして、家族の支え・・・多くの方々のおかげでこの２年間を過ごしてくることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、新たな道に進んでいくことになると思いますが、自分の信念と相手を思いやる心を大切に、ゆっくりと、一歩一歩、歩んでいこうと思います。

2年間の学びで得られたもの

坂井市立雄島小学校 **濱辺 直美**

『教師の協働を核にした組織マネジメント　～自己変容を求めて～』というテーマで、２年間の長期実践をまとめた。現任校である雄島小学校での研究主任としての実践は、教職大学院での２年間とリンクしており、これまでの自分の歩みを振り返るとともに、学校という教育現場における自分の立場を再確認できる貴重な実践となった。また教職大学院での合同カンファレンスやラウンドテーブル、長期休業中の集中講座など、異校種･異年齢でのディスカッションは、これまでのものの見方や考え方を深く捉えなおしたり、新しい発見ができたりして、自分にとって大きな学びの場となった。さらに合同カンファレンスの話題提供として「新しい世代を支え、学び合うことの意味」というテーマで発表する機会

をいただき、今年度の実践である新採用教諭との日々を紹介した。これは自分自身の学びとして、またこれからの指針となる貴重な経験になった。

専門教科である音楽の指導も実践研究を支えるものとして振り返り、これまでの指導に加え、教師同士の協働が指導の根底にあってこそ、より良い教育活動が展開されていくということを再確認できた。

これまで一教師として学級担任の業務や校務分掌の仕事をこなしてきたが、教職大学院の学校改革マネジメントコースで学ぶことにより、学校というコミュニティが教育の実践コミュニティとしての組織であることや、学校全体を大きく俯瞰して見ることの大切さを知ることができた。さらにどんなに大きなコミュニティであっても教師の協働つまり対話によるコミュニケーションが最も重要であるということに気づき、深く考えさせられた。

教職大学院での日々は自分にとって大変有意義な時間となった。それは、現場ではなかなかゆったりと考えられる時間がとれないこともあるが、幼稚園や保育園、小・中学校、高等学校、特別支援学校などの異校種の先生方と、多様なテーマでのカンファレンスという教育についてじっくり語り合う場をもつことができたということである。そして何より毎回違うメンバーと語り合うことにより、これまでの狭い考え方が少しずつ変容していき、柔軟に、幅広く捉えられるようになっていった。このことは自分にとって大きな変化であり、一人の教師としてまた一人の母親としてより深い経験となった。

研修成果を今後の現場に生かすために、現職教育として現任校である雄島小学校の職員に向けて伝達の場を設けたい。またすでに実践していることであるが、これまでの部会を低・中・高の３部会のほか、低・中・高をランダムに編成した部会も取り入れた。さらに授業力向上のため、他校の実践から学んだ『授業公開 week』も取り入れ、ベテランから若手まで自由に授業を参観する期間を設け、指導方法を学び合った。

夏の集中講座で読み進めた福井大学教育学部附属義務教育学校研究会の『福井発　プロジェクト型学習　～未来を創る子どもたち～』には、OECD が目指すコンピテンシーを実現するプロジェクト学習の先進的な実践が生き生きと語られていた。これからの未来を生きていく子どもたちや教師は、発意を持ち、その発意から思いを構想し、構想の具現化に向けて活動を構築する。それらの様々な活動を遂行・表現しながら自分の歩みを振り返り省察することで、次の発意につなげていく。そんな教師集団を自校でも作りたいと考える。そのためには、一人ひとりの意識の持ち方、教師の協働体制のつくりかたを改めて見直すことが重要である。今後の探求活動の推進のためにまだまだ課題は山積みだが、「教育目標を実現するために」「研究主題を解明するために」という思いをもち、ものを考え提案することを目指していきたい。学び続ける教師として、子どもの未来のためにできることから行動していきたい。

教職大学院での2年間を振り返って

坂井市立加戸小学校　**藤野　秀樹**

「長期実践研究報告」という巨大な壁を乗り越えた今、福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースで学んだ２年間で、自分自身が何を学び、何に取り組んできたのか振り返ってみる。

「児童も教職員も通うのが楽しくなる学校」をテーマに、研究を進めてきた２年間であった。「教員の授業力向上のための研修」「子どもの居場所づくり」について取り組みを進めてきた。しかし、「働き方改革」が叫ばれる中、「時間の確保」という壁にぶつかり、有効な手段を十分見いだせないままだった。

１年目、坂井市立（丸岡町）長畝小学校では、「よくわかる授業づくり」が必要であると考え、教員の授業力の向上を目指し、「教材研究タイム」の設定、「ミニ・ワークショップ」の開催、「授業公開週間」の実施などに取り組んだ。しかし、教師の指導技術を少しばかり向上させたところで（授業力の向上の必要性を否定するわけではないが…）、求められる「学び」には、到底繋がっていかないと感じるようになった。子どもたちが自らの力で課題を解決する力を身につける「学び」に変えていくためには、教員が「変わる」ことが必要であると思うよ

うにもなった。これは、教職大学院でのカンファレンスやラウンドテーブルに参加し、多くの先生方と語り合う中で得た自分自身の「学び」であった。

また、子どもたちを「愛おしい存在」と感じ、子どもの思いに寄り添い、子どもの力を信じ、子どもに任せること、つまり子どもに対する接し方を「変える」ことは、「授業を変える」のにも「学校を変える」のにも必要なことだという思いを強くし、子どもにとっての「居心地の良さ」「居場所（活躍の場）づくり」についてこれまで以上に意識するようになった。

教職大学院２年目、『学習する組織』を読む機会を得て、組織が「学習する組織」となるためには、「共有ビジョン」を持つことが大切であることを学んだ。学校という組織において、異なる考え方・背景をもつ教師集団にとっての「共有ビジョン」に成り得るものは、「子どもたちの笑顔」ではないかと考えるようになった。子どもが笑顔で過ごせるようにすることは我々教師の役割であり、笑顔あふれる学校こそ、「通うのが楽しくなる学校」であると考えて、様々な取り組みに関わるようにした。

２年目に勤務した坂井市立（三国町）加戸小学校は、旧門の教え「有書不讀子孫愚（書有れども読まざれば子孫愚かなり）」「有田不耕倉廩虚（田有れども耕さざれば倉廩虚し）」の下、長年にわたって勤労生産学習に力を入れている。その取り組みの中には、子どもたちの「活躍の場」があり、子どもたちの「笑顔」が溢れている。そこで、積極的に勤労生産学習に関わり、カメラを持って走り回り、子どもたちの「笑顔」を追いかける１年であった。

今、新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のために、教員が「変わる」ことが求められている。しかし、教員はどれだけ「変わる」ことができているのだろうか。そういう自分が、この２年間の学びを通して、どれだけ「変わる」ことができたのだろうか。実践を検討する新たな「長い物差し」を手に入れることができたのだろうか。

遅ればせながら、これまで努力してきたことが「子どもたちのため」ではなく、「自分のため」であったことに気がついた。これまで以上に子どもたちの「笑顔」を意識するようになった。しかし、子どもたちの「笑顔」のための「学び」を生み出せているとは到底言えない。「変わる」だけではなく「学び続ける」ことが必要なのだ。

この２年間、教職大学院のいろいろな場で語り合い、聴き合い、抱える悩み共有できたことは、自分にとって大きな財産である。教職大学院で学ぶ中で、常に感じていたことがある。それは、さまざまな取り組みも学びも、人と人をつなぐのも、人を「笑顔」にするのも、結局は「人間力」の勝負だということだ。これからも、様々な人と関わり、語り、つながることで変わり続け、学び続け、「人間力」を伸ばしていきたいと強く感じている。そして、「学び続ける」「人間力を伸ばそうとする」教師集団のリーダーとして、子どもの「笑顔」を追い求めていきたいと思う。

担当の先生方をはじめ、教職大学院の先生方には、つたない私の実践にご指導、ご助言くださりありがとうございました。深く感謝申し上げます。また、教職大学院で語り合い、聴き合った年齢も校種も教科も立場も違う様々な先生方にお礼申し上げます。そして、この実践を支え励ましてくださった長畝小学校と加戸小学校の先生方、本当にありがとうございました。

2年間の振り返りと今後の展望

越前市神山小学校　室谷　知徳

新採用時より 24 年間、小・中学校で体育・保健体育主任を歴任し、勤務校および勤務地区における体力つくりや競技力向上に努めてきた。また、数年間は、生徒指導主事の立場で、地域学校協議会に参加し、地域との連携の重要性を学ぶことができた。しかしながら、学校組織運営においては、体力つくり・生徒指導面で微力ながら尽力した程度に過ぎず、学校全体をマネジメントする教育実践の経験は乏しかった。これまで学級担任や学年主任として大切にしてきたことは、「師弟同行」「凡事徹底」「face to face」である。児童・生徒との時間をできるだけ共有し、喜怒哀楽を共にすること、当たり前のことを確実に行うこと、保護者への連絡は、電話や連絡帳ではなく家庭訪問等で面と向かって行うことを心掛けてきた。

現在の勤務校である越前市神山小学校は、越前市の南西部に位置し、山間部に広がる田園地帯に存在する、学級数 10（うち特別支援学級 1）、児童数 203 名、教職員数 20 名の学校である。越前市教育振興ビジョンの中で、「地域と協働した学校づくりの推進」が人間力を高める教育の充実の柱の一つに掲げられており、本校においては登下校時の子供見守り活動、読み聞かせ、水田での餅米つくり等で地域人材を活用している。しかしながら、それらの活動は単発的であり、計画性・系統性・発展性に欠けているのが実状である。着任１年目の平成 29 年度には、地域の伝統的工芸である瓦の製法を用いた焼き物作りを、担任をしていた６年生で行い、手作りの苔玉をのせて地域の地産地消の店で販売を行うという地域と協働の試みを新たに行い、保護者や地域の方々から大変好評を得た。まだまだ地域の宝（自然・産業・文化・人材等）は眠っていると感じ、それらを再発掘し、教育に生かす新たな取り組みをこの２年間、模索してきた。

こんな自分が教職大学院で学ぶことになるとは…。全くもって寝耳に水のことで、背中を押される形で教職大学院へ進んだものの、とにかく不安だらけのスタートであった。進学して初めての４月合同カンファレンスのレポートには、以下のように記している。

これから本格的な長期実践を始めるに当たり、多くの不安でいっぱいではあるが、まずはネットワークが広がることに喜びを感じている。今回は、第１回目の合同カンファレンスであったが、多種多様な院生によるグループ編成のお陰で、若い先生方のエネルギー溢れる学習意欲や、ベテランの先生方の知識や実践の豊富さを肌で感じることができた。同時に、これまでの自分自身がいかに勉強不足だったのかを痛感させられた一日でもあった。このカンファレンスが正に「主体的・対話的で深い学び」そのものであることに気付いた。これからの２年間、多くの方々に感謝しながら、研修・研究に励んでいきたい。

華やかな青春時代を過ごした母校である福井大学に 20 数年ぶりに訪れ、懐かしさとともに、今一度学び直しができることに喜びも感じながら、教職大学院での第１歩を踏み出した。あれから、早２年が過ぎようとしている。歳のせいもあるが、２年間がこんなに短く感じたことはなかった。まさしく「光陰矢の如し」とはこのことだと感じた。それだけ充実した２年間だったのだと思う。

ほぼ毎月１回の合同カンファレンス、６月・２月のラウンドテーブルにより、土曜日や日曜日に休めないことがあった。また、夏期集中講座や冬期集中講座は、長期休業中とはいえ連続して３日間、学校を空けることになった。幸いなことに、自分は現在、小学校勤務なので部活動に影響を受けることはなかったが、中学校や高等学校の先生方も多数学んでおられ、大変だろうなと思った。さらに、学校改革マネジメントコースには、教頭先生も数名おられ、その心労は計り知れないものがある。校種の違いだけでなく、遠方から通っておられる先生方もたくさんおられる。勤務日以上に早くに家を出て、夜遅くに帰宅する日もあったのではないだろうか。そういった方々に比べると、自分は恵まれた環境にあったと思う。陸上記録会や器械体操大会に参加できなかったことや勤務校には若干の迷惑を掛けてしまったと思うが、無事ここまでたどり着くことができた。

この３年間で、間違いなく神山小学校は変わったと胸を張って言える。神山小学校に異動となった教員が、自分のように「ご愁傷様」ではなく、「おめでとう」という言葉が掛けられるようになったと思っている。それはどうしてかと問われると即答できない自分がいる。と言うのも、様々な要因がタイミング良く、うまくかみ合って来られたからだと思っている。自分自身の力で、何らかの「学校改革」ができたのだろうか。果たして、うまく「マネジメント」できたのだろうか。これらのことについては、残念ながら十分にはできなかったと言える。しかし、この教職大学院学校改革マネジメントコースでの学びは、残された教員生活で遺憾なく発揮したいと思っている。

最後に、指導助言してくださった教職大学院の先生方、ともに高め合う姿勢を忘れない教職大学院で学ぶ同志、学校で協働を進める同僚や研究に賛同してくださった校長・教頭、様々な取組に協力して下さった保護者や地域の方々など、多くの方々に感謝するとともに、２年間の学びをこれからの教員生活の中で還元していくことで恩返しすることを誓って謝辞に代えたい。

在学生 授業研究・教職専門性開発コース

葛藤する中で変わった自分の考え方

福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程 石田 涼

私は、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程でインターンさせて頂いて、非常に多くのことを経験させて頂いた。最初の頃は、インターン、木曜カンファレンス様々な面で自分にしっかりとした軸がない分、周りの院生の考えていることについて行けなかったときもあった。それでも、授業実践や部活動指導、木曜カンファレンスで積極的に発言するようになって、様々な経験が蓄積されていく実感がある。

インターンシップを通して、自分の考えの変化につながることがいくつかあった。授業では、ゴールを決め、これ通りにやらなければいけないと考えてしまうと、子どもたちの予想外の反応についていけない時があった。自分だけではなく、いろんな先生方、子どもたちによって様々な見方があり、授業の中の問いも子どもたちごとに考えることが違ってくる。だからこそ、ただ自分がこう進めたいからではなく、子どもたち一人ひとりの学びをデザインするために、教員はどこまで踏み込むのかを考えなければならなかったと思う。来年の授業実践では、授業の目標をしっかり持ち、クラスの生徒全員が考えることのできる問いを考え、子どもたちの姿を常に頭に置き、授業をつくり決して授業者の押し付けにはならないようにしたい。また、子どもたちとのかかわりを通して自分の考えの変化につながる経験もあった。特に男子バレー部で関わりや学習支援の関わりの中で自分自身の価値観のみで判断してしまい、それぞれの学びに必要である要素を否定してしまっている自分がいたことに気づいた。教師は自分の価値観だけで、動いてはならず、一人ひとり求めていることを理解し、個々の学びをデザインしていくことが求められると今では思う。子どもたちのバックグランドを知り、コミュニケーションを多くとり、一人ひとりの成長のために、自分には何ができるのかを常に考えていきたい。

また、木曜カンファレンスでは、同じストレートマスターの先輩方や同期たちと様々な企画を行ってきた。その中で、自分はあまり発言することができず迷惑をかけてきたという実感がある。そんな自分でも、受け入れてくれ、主担当企画などを共に進めてきた院生の方たちには感謝の気持ちでいっぱいである。また、月間カンファレンスや集中講座では、たくさんの現職の先生のお話を聞くことができ、自分の中に還元できたことは非常に貴重であると考えている。

本年度修了された皆様へ

あらゆる場面でいただいたご助言は、インターンシップや今後の教員生活に生かすことができるものであると考えています。1 年間共に学んでいただきありがとうございました。

新型コロナウイルスの影響で、修了式などが中止になり、非常に残念ですが、皆様と同じように活躍できるように来年度もインターンシップ、各カンファレンスに取り組んでまいります。

実践から学ぶ

福井市中藤小学校 井上 尚紀

教師は学びの専門職ともいわれるように、学ぶとは何かについて考えることがあります。大学院 1 年目は、自分にとっての「学び」の定義が変わりつつある 1 年間だったと思います。それまで、学ぶとは新たな知識を得ることで、物事を見たり考えたりする視点が増えることに学ぶ感動があると思っていました。中学校の理科で、それまで何となく見ていた風景などは、太陽などの光が反射して目に届いたも

のを神経が感知しているものと知った時。さらに高校の物理で、色はそれ以外の色の光が吸収され、その色の光だけが反射して目に届いていると知った時。自分が目で見ることができているのには理由があることに感動し、世界の見え方が大きく変わったことを覚えています。

それに対して、本大学院の学び方を一言で表すと、「実践から学ぶ」といえるのではないかと思います。学部時代のレポートを見返すと、「教師に必要な資質・能力を主体的に学んでいきたい」「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業づくりをすることができた」等の言い回しがみられます。しかし、これらはどれも、本や論文等の資料から抜き取った言葉を並べたものに過ぎず、本当に自分の心の奥で納得できてはいなかったのだと思います。実際、教育実習の際に実習先の校長先生から「主体的ってなんですか？」と聞かれたとき、口ごもってしまいました。「主体的」という言葉は知っているものの、「主体的」に考えたり行動したりという経験をしたことがなく、自分にとっての「主体的」の意味を見いだせていなかったからです。この点、長期インターンシップや週間カンファレンス、合同カンファレンスの学びの場が設けられている大学院ではそのようなことはありませんでした。長期インターンシップでは、小学校で授業を見学させていただいたり、実際に授業実践をさせていただいたりしました。4 月の初めのほうは「1 年間で子供と関係を築いていくことができるのか」と不安に思っていたものの、1 年間で成長していく子供たちや、変化していく学級を見ることができました。授業実践では、学部時の教育実習ででた課題に基づいて実践をさせていただくことができました。週間カンファレンスや合同カンファレンスでは、文献や実践報告をもとに知識を得、それをもとにインターンシップで実践することができ、そしてそこで行った実践を語ったり報告書にまとめたりすることで、自分のものにすることができました。特に、合同カンファレンスでは、現職の先生ともグループを共にさせていただき、自分でも納得できていないことを「アクティブ・ラーニングとは〜」なんて言えたもんじゃなく、緊張感をもって話し合いに参加させていただきました。長い年月実践されてきた経験より、深い語りをお聞きすることもでき、自分の実践にとても役に立ちました。

学び続ける教師という言葉がありますが、教師にとっての学びとはまさに「実践から学ぶ」ではないかと思います。様々な教育書や文献から様々な教育的知見（知識）を得ることはとても大切だと思います。それを実践し、語り合ったりまとめたりすることで実践という経験が新たな学びになり、新たな価値が見出されるのではと思います。

修了生の先生方、この度はご修了おめでとうございます。

自ら学び続けるための基盤

福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程　桑原　寿々奈

私は小学校免許プログラムで 3 年履修であるため、これまでの 2 年間の振り返りを行いたいと思う。

M1 では、小学校 1 年生のクラスでインターンシップをさせていただいた。教育実習は高等学校だったためか、4 月当初は子どもたちの発達段階に慣れるまで、かなり困惑しながら子どもたちと関わる日々だった。そのような子どもたちに対して最初は、「何もできない 1 年生」と捉えながら見取っていて、子どもたちの「できないこと」や「悪いと思うところ」ばかりに目がいっていたのが、1 年生の発達段階を理解していくうちに、「大体このくらいならできる」や「これはまだ難しい」といったことが、段々と分かるようになってきて、子どもたちが「できるようになったこと」や「頑張っているところ」も見取ることができるようになったと思う。さらに、授業を見る視点を子どもたちにすることによって、子どもたちが前よりもどのように成長しているのか、どのような学びであったのか見取ることができるようになった。

M2 になり、今度は 6 年生のクラスでインターンシップをさせていただくことになった。M1 では週 3 回でインターンシップに行くことができていたのだが、M2 では小学校免許取得のための学部の授業を受ける関係と教員採用試験の関係で、前期は週 1 回になってしまった。最初は単純に子どもたちと会う機会が減ってしまったことで、信頼関係を築くことにかなり苦労をした。子どもたちの実態を知って

いく中で、クラスの実態についても分かるようになってきたが、その中で課題も見えるようになってきた。前期は、クラスの課題に対して様々な葛藤を抱きながら、改善策を考え、担任の先生に相談したり、自分なりにアプローチしたりしてクラスが成長するのはどうしたらよいかを考えていた。

授業実践では、M1 時の算数「かさくらべ」の授業実践から始まって、道徳、国語の単元での授業実践を行った。M2 では、道徳の授業実践や社会の単元の授業実践をさせていただいた。授業に関して、M1 の時は、教科書の内容をどのようにして分かりやすく教えるかということを考えていた。M2 になってから、子どもの見取りから授業デザインすること、教科書の内容を分かりやすく教えるだけでなく、子どもが思考・判断・表現できるように授業デザインすること、教科書の内容を教えるのではなく教師側がこの単元で大事なことを意識して授業デザインをするようになった。授業が始まる前に、授業デザインに関して、担任の先生や教科担任の先生方等、多くの先生方からアドバイスをいただきながら何とかできるようになった部分はあるものの、一方で M1、M2 通して、教材の魅せ方、指示や発問のタイミング、ファシリテーション等、「材料がそろっているのに、上手く料理ができていない。」という授業中での課題が浮き彫りになった。これは M3 での課題である。

春から M3 になり、教職大学院ラストイヤーになる。あと 1 年でインターンシップ生という立場ではなく、本当の教員として学校現場に出ることになる。教職大学院を卒業していると、一部校内の初任者研修が免除になる。つまり、教職大学院を卒業していない人と比べて、より自らの力で教職の力量形成をしていかなければならない。つまり、あと 1 年で自ら学び続けるための基盤を築いていかなければならない。自ら学び続けるための基盤を築くためにはどうしたらよいか、3 年目で考えていきたい。

修了生の先生方へ

大学院修了おめでとうございます。2 年間先生方と実践を聴き合い、語り合うことができてとても良い学びができました。ありがとうございました。またどこかでお会いできるのを楽しみにしております。

支えられて自分を見つめ直す

福井市中藤小学校 藤本 紗奈

私はこの一年を振り返ると、多くの人に支えられながらたくさんのことを学ぶことができたと思う。子ども、インターン先の先生方、大学院の同級生や先輩、他コースの院生(現職の先生方)といった周りの人々との関係の中で、私は常に自分自身を見つめなおし、行動してきた。周囲の人々と比較し自分の出来なさに苦しむことも多かったが、私を支えてくれたのもまた周囲の人々であった。

大学院に入学して初めて小学校に関わることになり、不安しかなかった。毎日何もできない自分にやきもきしながら、手探り状態でインターンを行っていた。子どもの何を見たらいいのかわからない、記録をどう書いていいかわからない、子どもとどうかかわっていけばいいかわからない不安を抱えたままインターンを行う中であっても、学校の子どもたちはいつも私に笑いかけてくれた。昨日あった話、好きなものの話、頑張ったこと、様々なことを笑顔で楽しそうに話している子どもたちを見ていると、私も自分が今できる精一杯のことを頑張ろうと思えた。

インターンを行っていくうちに、自分の中で様々な悩みが生まれてきた。しかし自分自身の悩みや考えを外に出すことは簡単なことではない。悩むことは自分に能力や努力が足りていないだけで、他に相談することではないと思っていたからだ。しかしそんな考えを変えてくれたのは、同期や先輩方であった。木曜カンファレンスで行われるインターンの振り返りの時間にどんな些細なことでも共有し、他の人々の考えを自分に取り込む姿を見て、自分は視野が狭かったと反省した。自分の考えや悩みを共有していくと、他の人の意見は自分とは全く違った視点であり、面白かった。そのうち M1 のみんなとはプライベートで出かけることで過ごす時間が多くなると、大学院での在り方も変化していった。同期間での関係はただの仲のいい集団から、共有ビジョンを持ちともに前に進もうとするコミュニティへと変化していったように感じる。

このように他の人々との関わりを重ねていく中で、インターンでの在り方も変化していった。それはインターン先の先生に相談するようになっただけでなく、自分自身を見つめる機会が以前にも増して多くなったからだ。自分自身について考えることで自分の行動や思考の中心に、自己肯定感に低さに関係があることに気がついた。インターンでは常に子どもの声を聴いて行動しよう、共感できなくとも受け止めようと思い行動していた。その根幹には「自分が自分でいていい」という感覚を大切にしてほしいという思いに気が付くことができた。そのおかげで私は目標をもってインターンに取り組むことができた。

この一年、子どもをはじめとする様々な人と関わる自分の姿を通して、自己肯定感について考えることが多かった。来年度は新しい場所へ移動するが、自分自身についても、目の前の子どもとの関わり方の中でもこれまでと変わらず、自己肯定感をキーワードとして考えていきたい。大学院も新体制となりこれまで以上に、コミュニティの在り方とその中での自分の役割について問われるだろう。自分にできることを一生懸命やっていきたい。

一年間という短い間でしたが、私の中で先輩方の存在は大変大きなものです。不安を抱えていた私を支えてくださった M2、M3 の先輩方、他コースの先生方ありがとうございました。

2 年間の学びを振り返り気づいた、自分の変化

福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程　三村　桃加

福井大学連合教職大学院に入学して、早 2 年が経過した。大学時代、西洋史を専攻していた私にとって、この 2 年間は集中して教育のことを考える期間であった。

ストレートマスターの院生は、毎週「週間カンファレンス」と呼ばれるカンファレンスを行う。インターン先での学びの振り返りや、協働探究の授業デザインを考えるといったことをテーマに話し合い、その話し合いを通して自分自身の理論を構築していく場になっている。そのカンファレンスの中で、何冊かの指定図書の中から一冊の書籍を選び、「公教育の意義」について考えていく時間がある。私が選んだのは、カントの『啓蒙とはなにか』である。

この時間では「公教育の意義」について考えたのだが、私がここで述べたいのは「公教育の意義」ではなく、「協働の重要性」である。この 2 年間を振り返ってみると、自分の考え方には変化がある。その変化とは、“協働”に重要性を見出すようになったことである。恥ずかしながら、学生時代、高校受験や大学受験を重視してきた私にとって、学習とは机に向かい如何に正しい答えを導き出すかであり、答えのない問題に協働して取り組むことではなかった。教職大学院で学ぶことを通して、知らず知らずのうちに“協働”し、協働することの大切さを体感していたのであろうが、『啓蒙とはなにか』を読むことによって、明確に自覚し、その重要性を価値づけすることができた。

まずは、カントが『啓蒙とはなにか』のなかで述べていることを説明していきたい。カントは、「認識」を三つに分けた。感性、悟性、理性である。簡単に言うと、感性とは直感的に感じることであり、悟性とは自分で判断すること、理性とは自ら考え、判断したことをもとに、周りの人々と協力し合意形成しながら、より良いものや価値観を生み出していくことである。カントの生きた時代は、身分制が存在し、国民一人ひとりの意見が尊重されない時代であった。その様な時代のなかで、カントは民主主義の国づくりを行おうとしたのである。そして、国を成り立たせるために悟性と理性の重要性を唱えた。規模は非常に大きいが“国”もひとつのコミュニティである。いわば、カントはコミュニティを形成していく上で、必要となってくる要素として悟性と理性を重要視したといえる。教職大学院での学びの母体の一つであるストレートマスターの院生のコミュニティもひとつのコミュニティである。カントが重要であると考える悟性や理性は同様に、これらのコミュニティでも重要になってくる。そこで、ストレートマスターの院生のコミュニティを取り上げ、協働について考えていきたい。私たちは、インターン校で児童を見取る中で、まずは児童の姿を見て直感的に感じる。例えば、「楽しそうだな」「困ったような顔をしているな」「いま表情が変わったな」児童の姿から様々なことを感じ取る。これが感性に当たると考える。そして、その要因を探ったり、「こういうことに興味ありそうだから、次はこうしてみ

よう」と判断したりする。これが、悟性にあたる。しかし、それだけでは偏った考え方になってしまったり、より良い対応ができなかったりすることになりかねない。私たちは、児童を見取って考えたことをメンターの先生やストレートマスターの院生、教職大学院のスタッフの先生方と話し合うことによって、多様な視点で捉え直したり、多様な対応法に気づいたり、自分一人では考えが及ばなかった部分まで含めて、考えを深めることができる。

カントは国民一人ひとりが自らの考えをもって話し合いに参加し、「民主主義の国家をつくる」という同じ目標をもって、それぞれの考えを合意形成し、国の基盤となるものを創っていこうとした。私が属する様々なコミュニティも根本のところでは変わらない。悟性と理性が重要なのである。私は、これまで理性の重要性を感じずに来たが、教職大学院での学びを通して、自分が様々なコミュニティに属していることを自覚し、また“協働”することによって、よりよいものを生み出していく重要性を学んだ。

実践的なコミュニティであるために、また自分自身が学び続けていくために、そしてより良い教育を目指していくためには、“協働”ひいては理性が必要となってくることがわかる。もちろん、自分で判断すること（悟性）も必要不可欠である。悟性と理性を繰り返しながら、実践を積み重ねていくことの大切さを、教職大学院での学びで痛感している。

残り一年、様々なコミュニティに属しながら学びを続けていくことになる。国家の成立を目指したカントと比べれば、なんとも小さい規模かもしれない。しかし、規模こそ違えど、中身は同じである。コミュニティの中に自分は存在していることを自覚し、カントが重要視した悟性と理性を働かせた充実した１年を送っていきたい。

2 年目の学びを充実させるために

福井大学教育学部附属義務教育学校･前期課程　村林　雅也

初めての教職大学院での学びは、分からないことや戸惑うことの連続であった。授業実践に挑戦させていただくことになったものの、どのように授業をデザインすればいいのだろう。大学院生としてどのようなテーマを持って探究すればいいのだろうか。インターンシップの中での自らの役割はどんなことだろう。様々に模索し葛藤するうちに、気が付いたら１年目を終えていたが、それだけ中身の濃い１年間であったことは間違いない。特にこの１年間で、学校現場でお仕事をされる多くの先生方とお話しし、教えていただく機会をいただき、また私と同じように教職を志望する院生と学び合う機会をいただき、多くの貴重な出会いに恵まれたことには深く感謝している。しかしながらインターンシップやカンファレンスの場面で多くの気付きをいただける中で、ときに目の前の出来事ばかりに一生懸命になってしまい、長期的なスパンを見通した探究が疎かになってしまっていた自分に反省させられている。

４月以降も学校現場でのインターンシップを継続することとなる。ストレートマスターの院生が集まる週間カンファレンスではM2として企画や運営に携わることになるし、新しく後輩を迎えることにもなる。幸いなことに、今の私にはたくさんの“分からない”ことがある。そして“分からない”を追究する度にまた新しい“分からない”ことが生まれていく。これからもたくさんの新たな疑問や気付きとの出会いを大切にしながら、そして新たな学び合うメンバーとの出会いに感謝しながら教職大学院での学びを充実させていきたいし、M2として１年目にはできなかったような探究や実践にも取り組むようにしていきたい。

今年度教職大学院を修了される皆さま、おめでとうございます。直接お祝いの言葉を申し上げられず残念です。ストレートマスターの先輩方には、週間カンファレンスの場面で多くのアドバイスをいただいたり、親身になって相談に応じてくださったりとたいへんお世話になりました。また現職の先生方は、これまで月間カンファレンスや集中講座の場面でたくさんの有益なお話しをお聞かせいただき、また私の拙い実践や考察に多くの助言をいただきありがとうございました。諸先輩方との対話やいただいた示唆のひとつひとつが、自らの学びを深めるうえで貴重なものでした。これからのご活躍をお祈りします。また、今後とも学校現場やラウンドテーブルの席ではお世話になる機会があるかと思います。引き続き、よろしくお願いいたします。

在学生 ミドルリーダー養成コース

1年間を振り返って

岐阜聖徳学園大学附属中学校 小椋 幸美

私は、大学院に通わせていただき、自分のやってみたいこと、思い描いていたことが、より具体的に「自分事」として考えることができるようになりました。今までは、ただプロジェクト型学習をやってみたいと漠然に思うだけでしたが、その教育をするために、何が必要で、何をやっておかないといけないのか、どのように進んでいくのか、どんな問題点があるのか、などじっくりと学び、考える時間となりました。

今年は、理論と並行して実践をしました。理論的な面を学ぶほど、自分がいかに勉強不足かということを思い知り、実践するほど、準備不足で浅い考えであったのかということを痛感する毎日でした。子どもたちにとっては、この時間の授業は、一生に一度の授業で、こんなに半端な状態の授業で、その一時間を使ってもいいのかと悩むことも実際にありました。しかし、その私を救ってくれたのが、同僚の先生たちや子どもたちでした。ある先生は面白そうと言って一緒に考えてくれたり、親身になって相談にのってくださったり、自分ひとりでやろうとするから、苦しいんだとそのとき改めて感じたのを今でも覚えています。「協働」の大切さを、言葉では理解していましたが、実感したのはそのときです。もちろん今までも一人で働いてきたわけではないですし、助けることも助けてもらうこともたくさんありました。しかし、こうして一つの教育に対してじっくり腰を据えて、一緒に考え、アドバイスをもらい、手探りながらも進んでいくことに楽しさや喜びを感じる瞬間でもありました。そして、何よりも私にパワーをくれたのは子どもたちです。子どもたちのあのキラキラした目、こんなことが分かったと見せにくる表情、分からないところを友達と協力して解決しようとする自然につながる仲間の輪、私自身が知らないこともたくさんあり、子どもたちの話を聞きながら、自分が勉強させてもらっていました。教科書から飛び出した子どもたちの学習は、自分の予想をはるかに超え、数学という枠組みさえ簡単に跳び越した、「学ぶ姿」そのものでした。

しかし、良いことだけではありません。課題も山のように見つかりました。この学習の意義の伝え方、この学習のために準備、課題設定の方法など、子どもたち任せにしすぎた点があるので、土台をしっかりと作ったうえで、子どもたちが伸び伸びと取り組めるようにしたいと思っています。

私は、この一年間を通して、今まで考えたことのなかったこと、考えるのを避けていたこと、それを真正面から受け止める一年となりました。やりたいことがあったもののやり切れなかった自分、準備が不足した中途半端な授業、自分の考えの甘さ、課題はまだまだあります。しかし、得たこともたくさんありました。決してこの一年間は無駄ではなかったと感じます。残り一年で、自分がどこまで成長できるか分かりませんが、手を抜くことなく全力で取り組みたいと思いますし、大学院を卒業してからもずっと、子どもたちと楽しく数学を共に学び続けたいと思っています。

最後になりましたが、修了生の先生方、貴重なお話をたくさんしていただきありがとうございました。私にとっては、先生方のお話は驚きの連続であり、自分を振り返る大切な時間となりました。「先生方の言葉からヒントを得て、自分なりに考え、取り入れてみる」そのような繰り返しだったかと思います。しかし、それこそが今の私に本当に必要なことで、自分の成長につながりました。卒業されてからも、先生方の取り組みは続いていくかと思いますが、私も負けないように頑張り続けたいと思っています。本当にありがとうございました。

学びの振り返り

カリタス女子中学高等学校 小俣 悌彦

それまで訪れたことがなかった福井県に足を運ぶのが、今では当たり前となっているというのがとても不思議な感覚です。３月の学位授与式がなくなってしまい、１年が終わった実感がまだ持てないでいます。教職に就いて今年度が 23 年目で、現任校では 16 年目ということでそれなりのキャリアがあると見られてしまいますが、経験不足、勉強不足ということを痛感させられた一年でした。勤務校は 2020 年の 10 月に創立 60 周年を迎える総合学園です。カトリックの精神のもと、「普遍的な愛をもって人に尽くす人間の育成」という教育理念があります。私立学校ということで教員の異動というものがなく、安心して働ける居心地の良い職場ではありますが、気づくと一年のほとんどを同じ場所の狭い空間で過ごしてしまっていて、時代の変化に疎くなってしまっているという感覚を持つことがあります。それでも日常の様々なことに追われているうちに、あっという間に一年が終わっていました。他の多くの学校と同様、本校でも年齢で言うと 50 代後半の教員が多く、しかも重要な役職を担っています。経験で乗り切ってこられた時代は良かったのですが、今の時代は変化が当たり前で、そして今後は予測がつかない先行き不透明な時代に向かう中、教員自身が学び続けながら組織として課題に立ち向かっていかなければならないという思いを強くしています。昨年の２月に福井大学のラウンドテーブルに初めて参加した時、生徒によるポスターセッションでは、堂々と発表する小中高生の姿に感動し、本校の生徒の「主体性」を育んでいきたいという気持ちを持ちました。さらに、様々な学校の先生の具体的で、実践的な取り組みから大きな刺激を受け、教員同士がもっと協働してよい学校を作っていきたいと思いました。そして、昨年４月に、院生としての生活がスタートした時点では「主体性」「協働」というテーマで大学院での学びを深め、実践につなげていきたいと意気込んでいたことをよく覚えています。この１年は、自分自身にとって主体的に学ぶことのできた貴重な一年でした。昨年までは、自分の担当教科、学年、部署の中で役割を果たすことしか意識が向かなかったのですが、この一年は全体を俯瞰しながら、勤務校がどうすれば組織として良い方向に向かっているのかを常に考えて日々の実践に取り組んできました。福井大学教職大学院の大きな特徴は、立場や年齢、キャリアなどが異なる参加者同士でカンファレンスという機会が中心になっていることです。当初は、自分以外はほとんどが地元福井の教員であったり、福井大学の出身者が多かったりすることに、居心地の悪さを感じ、神奈川の私学の教員が福井に来る意味はあるのかと疑問に思ったものです。しかし、そんな気持ちはすぐになくなり、それよりも現職の教員の方々やストレートマスターの院生から受ける刺激が大変新鮮で有意義で代えがたいものになりました。自分の実践を語る、ただそれだけのことを、教員になってからこれまでする機会がなかったのです。また、優れた実践記録や専門書を読んだり、他校の先生から実践報告を聞くことで自分の実践を見直す機会となりました。何か良い実践は出来ないものかと頭の中では常に改革案を練っていたものの、結果として組織が変わるような取り組みには至りませんでした。しかし、この一年の間ずっと変わらないのは「良いコミュニティ」を作りたいという思いです。この４月からの２年目では、自分の周囲の小さなコミュニティをより充実したものにしながら、教職大学院での学びを職場内に広めていきたいです。新型コロナウィルスの影響で新年度はスタートから難題も多いですが、教員が一致団結して、良い教育活動に取り組んでいく一戦力となれるよう精進していきます。最後になりますが、この一年で教職大学院で出会った先生方、院生の方には言葉に尽くせないほどお世話になり、感謝しています。そして修了生の方とは同じグループになる機会が多く、たくさんの刺激や気づきを頂きました。私自身が勉強不足で、至らない説明や質問をした際も温かく対応して頂き、学びがより一層深まりました。まだまだ至らないところが多く、今後も先輩方からの助言も頂きたい気持ちですが、そうも言っていられません。１年目で得た学びを、教職大学院で新たに出会う方々に対し、さらに良いものにして伝えていきたいです。今後はラウンドテーブルまたは研究会などの機会でお目にかかることがあるかもしれませんが、その際には自分の成長した姿をお見せできるよう、良い実践に向けて取り組んで参ります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。働き過ぎには気を付けて健康第一で過ごせますようにお祈り申し上げます。

多きに感謝

カリタス小学校　海東　直希

まずは、修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。２月上旬になんとかお話をうかがうことができたものの、お祝いの席が叶わず、Ｍ１の私でさえ残念な気持ちがにじんでおります。ただ、これから本当に先行き不透明な毎日が続きます。これからの日々も、皆様が健康でいられますよう、心よりお祈りしております。

修了生の方には、カンファレンスで適切なアドバイスをいただけたこと、記憶に新しいです。最も心に残っているのは、コミュニティ・オブ・プラクティスの内容をはじめとした難しい文献の内容を的確にアウトプットし、伝えてくださったことでした。また、学校ごとの千差万別の取り組みを知ることで世界が広がりましたし、その中に共通点が見えてきたことも喜びでした。私自身も１年目が終わりを迎え、現在特に気になっているのは、みなさんがどのように論を進められてこられたのかということです。４月以降、６階の会場にはぎっしりと並ぶであろう冊子を手に取り、サイクルを読み取りながら、勉強させていただければ…と思っております。

１年目はあっという間でした。ない脳みそを奮い立たせ、頭に冷や汗ばかりをかきながらも、自分の足跡と現在地を探る旅は、濃密で充実していました。実際、先日提出を終えた１年目のまとめは、実践の省察が十分にできず、自らの力のなさを痛感するばかりでした。しかし、振り返り、編み直し、言語化する過程は、自分が「真に大切にしたいこと」は何だったのかを問い直し、再認識できる尊いものだと感じることができました。

カンファレンスでは、授業作りの話をする度に「結局は問い」という話に至ることが印象的でした。また、主体性主体性というものの、問いが教師主導になっていて子どもの内から出たものでない限り、その“主体性”は結局は「強制された主体性」になるという話も心に残っています。４月からも、子どもたちが真に切実感のもてる自分事の「問い」が設定できるように、その場しのぎの毎日ではなく、長期的な単元構想を練られるよう計画的な日々となるよう実践し、教職大学院にて省察を繰り返していきたいと意気込んでいるところです。

福井へは、神奈川から新幹線で通っておりますので、皆さん「忙しいでしょう」と言ってくださいます。ただ、私にとっては、自分の研鑽を積める旅は「贅沢な時間」であり、今もまさに「お願いだから早く福井に行かせて」と心が沸々言っているところです。ただ、生活は一変。日常がいつ戻ってくるかは分かりません。今、この原稿を書いているときも、身を粉にして働いてくださっている医療従事者の人がいらっしゃいます。何よりその方々に、そして自分が置かれている「学べる」状況に感謝をし続け、これからを過ごしていきたいと思います。

最後に…余談ですが、自宅にていくつか読み漁っていたのは、「宮沢賢治」の童謡。初めて読んだ「ガドルフの百合」の一説に目を丸くしました。<みんなどこかへにげたかな。噴火があるのか。噴火じゃない、ペストか。ペストじゃない。またおれはひとりで問答をやっている。…>背景は分かりませんが、あの当時“ペスト”を知っている人はそういないのではないでしょうか。宮沢賢治、あっぱれです。多きを学びたい…と思う、３月末日でした。

改めまして、修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在学生の皆様と諸先生方、これからもどうぞご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

持続可能な学校を考え始めた1年間

福井県立羽水高等学校　永田　卓裕

ちょうど１年前の３月の終わり、教職大学院への入学に加えて校内の人事異動や分掌の組織改革などが重なり、１年後の自分どころか１ヶ月、１週間後の自分も想像できないような精神状態だったことを思い出す。今こうして１年をふり返っても、ある意味緊張とも言えるその状態はずっと続いていたように思える。ただ一つ言えることは、その緊張が不安からある種のワクワク感に変わりつつあることを自

覚できていることかもしれない。その要因は、この激動の１年間で自分の中に育てたい・花を咲かせたい考え方＝「種」が生まれてきたことにある。

それは、生徒を主語にして語る文化である。私がこの大学院で学び始めたきっかけは、勤務校である羽水高校でのプロジェクト学習（PBL）の深化・進化を図るためである。入学を決めた一昨年の 11 月にはそう感じていた。おそらくその考えの根底には、自分が PBL 担当者としてそれまでの３年間を必死に走り抜け、自分の力・声で PBL を推し進めることを考えていたことがある。だがその考えは、この一年間で変わった。毎月のカンファレンスやラウンドテーブルでの各先生の語りは、それぞれ自分の実践を報告しながらも、その主語は常に子どもたちであった。そこから私の実践も少しずつ変化し始めた。自分の考えを学年団の先生方に伝え納得してもらうために、自分の言葉で直接訴えるのではなく、目の前の生徒の言葉を生かすように心がけ始めた。なぜこの実践をする必要があるのか、本当にこのような実践を生徒はできるのか、先生はどう関わるべきなのか...このような議論は、新しいことを始める際に必ず起きる。そして担任や学年、校務分掌などそれぞれの立場からそれぞれの主張をぶつけ合ってしまう。その結果、どうしても議論が右往左往してしまい、最終的に当初の目的とは違った形で落ち着く。様々な立場から意見を出し合うことは価値があることであるが、その議論を建設的なものにできるかどうかは、生徒を主語にして議論しているかどうかなのだと思う。

私が特にそう感じたことのきっかけとなったのは、職場で同僚から聞いた声だった。教員としての勤務年数に応じて受講する研修に参加した先生方が、その研修について語っている場に遭遇した。そこで語られていたのは、異校種の先生方とグループを作り、それぞれの実践を報告し合うという研修方式に対するネガティブな意見だった。「自分の実践を話しても理解されなかったり、グループの先生たちの実践を聞いても何も質問やアドバイスができなかったり、なんのためにこの研修が必要なのかわからない・・・」と言った内容だった。私も数年前にこのような形式の研修に参加した時、似たような感覚を持ったことを思い出した。しかし同時に、疑問をもった。大学院でのカンファレンスやラウンドテーブルはまさしくその形式なのに、なぜこんなにも充実感が違うのだろうか。もちろん、参加者のモチベーションやそのような場の経験数もその原因になりうるのだろうが、それだけではない。やはり、一番の要因は児童・生徒（の学び）を中心に議論できるかだと考える。そしてそれがカンファレンスやラウンドテーブルの場で成り立つのは、そこに参加している先生方が日頃それぞれの学校でも同様の語りをしているからだと感じる。

だからこそ、私がこの２年間で目指すべきことは、私自身の思いを同僚の先生方にいかに納得してもらうかではなく、生徒を主語にして語る文化を自校に根付かせることであると感じている。そのために何ができるかは、まだまだ深めていく必要があるが、私がこの考えに気づけたのは修了生の皆さんのおかげである。この一年、長期実践報告の執筆に向けて自らの実践や生徒の学びと向き合う先生方の語りは、私にとって何よりの教科書であった。

最後に修了生の皆さん、修了おめでとうございます。１年間大変お世話になりました。３月のカンファレンスで修了生の皆さんにお会いし最後の語りをお聞きできなかったことは残念であるものの、同時に今後ラウンドテーブルなどの場でまた再会し、互いの成長・生徒の成長について語り合えるできることを楽しみにしています。

在学生　学校改革マネジメントコース

1年間のふり返りと今後の展望、修了生に向けたメッセージ

福井市森田中学校　青木　喜一郎

長年、教師をしていて様々な場面に遭遇してきましたが、その度に「こんな時に何を根拠にしてどのような判断をすればよいのだろうか、教えてほしい。」という思いをもちました。若い時にはそれほど思わなかったのですが、年をとればとるほどその思いは強くなってきました。

このような時に、教師として駆け出しの頃からずっと御指導いただいている先生から、これからの教育の在り方などを教職大学院で学ぶことの重要性をご教示いただきました。本当に有り難く思っています。これがきっかけで、もう一度学び直してがんばってみようという気持ちになり、教職大学院に入学させていただきました。

今年度の４月に教職大学院に入学して良かったと思うことは、まず、自分自身が変わらなければならないと真剣に考えるようになったことです。そして、大学時代の詩吟の先生が言われていた「人は８割が学問によって動かなければならない」という言葉を思い出しました。自分自身の根幹をつくることのできる良いチャンスだと思えました。

毎月のクロスセッションで様々な先生方や学生のみなさんと話し合う中で、これからの時代に必要なスキルや現在の自分に足りない事などが見えてきました。学年主任という立場で、若手教員を育てながら学校運営に資するためにはどうすれば良いのかを考えた結果、「共有意識を大切にしながら教師力を高めていくこと」に辿り着きました。

学年主任として、管理職の先生の考えを理解し、学年の先生や研究関係の先生たちとできるだけ意思疎通を図りながらお互いを理解していく。そして、生徒たちと私たち教師の繋がり、生徒同士の繋がりを大切にした学年にしていく。今年度、様々な学年行事に「共有」を意図的に盛り込んだことで、良い成果を得ることができたと思っています。行事の度に、教師みんなで生徒の現状を確認し、身に付けさせたい力を考え、実行し、省察する。この過程を何回も繰り返してきました。この繰り返しにより、生徒は自分たちが着実に成長していることを実感できるようになり、とても落ち着いたと思います。

今年度、自分の学年を経営していくにあたり『コミュニティ・オブ・プラクティス』を参考にしました。コミュニティの成長には五つの段階があることを知り、「コミュニティが成長するにつれて鼓動もかわっていく。だがコミュニティを開発する上で、鍵となるのは、発展の各段階にふさわしいリズムを見つけることなのである」という一節が印象に残りました。そこで、自分の学年にこのリズムをあてはめて考えてみました。

今年度
２学年スタッフ…横のつながりを大切にする。「横の助け」に感謝の念。自分から問題を見つけようとする意識。自分から動こうとする行動力。
自分自身　…コミュニティの価値（共有意識）を実証。闇ルートで一対一関係構築。
メンバー同士をつなぐ。ディスカッション形式でインタビュー。
事実を積極的に提案する。

今年度は、この中でも横の繋がりを大切にすることができたし、お互いが「横の助け」に感謝することができたと思います。（人は縦（上司）への感謝はするが、横同士の感謝はおろそかになりやすい。）

来年度
２学年スタッフ…個人の「責任範囲」を広げる。共同責任の意識をもつ。公の場で発言できる。
各自が自由に発言できる。対等の関係性。
自分自身　…対等の関係性。

来年度は、さらに教師力向上に意識して取り組みたいと思います。

今年度、学習して思ったことは、教師力とは「その人自身が考える責任範囲の広さ」だということです。与えられた責任範囲のみで満足せず、その範囲を超えたところでも自分のこととして捉えることができるかということです。

これは、生徒にも通じることだと考えます。今年１年かけて、自立できる生徒、自分のこととして考えることのできる生徒数は増えてきました。しかし、まだその数は少ないのが現状です。より広い責任範囲で自分のこととして捉えることができる生徒を育成していきたいと思っています。

修了生の皆様におかれましては、私一人では辿り着くことができないであろう様々な気付きやアドバイスを与えてくださって感謝しております。ここから生まれ出たことを、みんなで広めていきたいと思っています。

この1年間を振り返って

福井県特別支援教育センター **大石橋 義治**

修了生のみなさま、おめでとうございます。新型コロナウイルスの影響で、修了式、最終カンファレンスが中止となり、先生方の晴れ姿と最後の語りを見聞きすることができずとても残念です。先生方との出会いは、ちょうど１年前の４月でした。初めてのカンファレンスで、とても分かりやすく御自分の実践について語る先生の姿にとても感動したことを覚えています。実践で行ってきた事実だけでなく、そこで何を考え、誰と協働したのかといったストーリーとしての語りはとても新鮮で、その中に自分の実践と重なる部分が多くあることに気づかされました。同時に、「自分はこのように語れるだろうか」と不安な気持ちにもなりました。しかし、そんな私のたどたどしい語りを先生方は優しいまなざしで聴いてくださいました。そんな先生方のやさしさに励まされながらなんとか大学院での１年間を過ごすことができました。本当にお世話になりました。

私は今年度、通常の学級と通級による指導との連携のあり方について、その課題を明らかにし、特別支援教育コーディネーターと協働しながら、対象児童の見立てや支援の共有を図ることができる方策について考えてきました。その結果として、学級担任と通級指導担当者とが、対象児童の見立てや支援方法を共有する仕組みとして、それぞれが参加できる支援会議の設定や、お互いの指導場面を参観し合うことができる機会をもつことが有効であり、そのことを中心的な役割を果たすのは特別支援教育コーディネーターと共通理解することができました。この実践を通して、外部機関として学校支援を進めるためには、その学校の誰を協働し、どのような仕掛けを行い、その取組みをどのように校内に広めていくかが重要だということに気づきました。また、合同カンファレンスにおいて他校の先生方からは、「自分の学校においても同様の課題があり、今回の実践を参考にしながら取組んでみたい」「連携を図る仕組みづくりには、管理職の役割も大きいのではないか」という御意見をいただきました。特に、自分の視点にはなかった管理職との協働については今後の私自身の課題の１つになると感じました。

特別支援教育センターに勤務して３年が過ぎました。教育相談等でかかわった学校や先生方とは、信頼関係を深めることができたと感じていますが、同時に、少しなれ合いの関係にもなりつつあるように思います。その中で、大学院での学びを通して、この３年間の自分の実践をじっくりと振り返る時間をもてたことは、４年目からの自分の実践の大きな糧となりました。この貴重な時間を与えてくださった職場の上司や同僚、大学院の先輩の先生方にあらためて感謝したいと思います。

１年目を振り返って

福井県立若狭高等学校　兼松 かおり

コロナの影響がまだまだ収まらない中、１年目の教職大学院が修了した。この１年の福井大学連合教職大学院生活を振り返ると、一番印象に残っているのは、全く違う校種の先生方との「カンファレンス」だ。

まずカンファレンスで自らを「語る」ということであるが、今まで自分の中でもやもやと整理されていないことが、「語る」ことと、それについて様々な先生方に自分の中の気づきを言葉でいただくことによって、自分が語ることについての意味づけが明らかになることが多かった。例えば、一例をあげるとカンファレンスの中で自分が「探究的な学び」をどう組織するかについて語っている際に、グループで一緒になった先生に「先生はとにかく生徒がどう思っているか、生徒がどう成長するかを大事にしながら、やってこられたのですね。」との言葉をいただき、はっとすることがあった。自分では当たり前として気がついていなかったことを気づかせてくれた一言だった。

また「傾聴する」際には、同じ教育であるにもかかわらず、全く知識のない校種の先生方の様々な面で工夫やご苦労をお聞きすることは、本当に刺激的であり、また自分を振り返る上で役に立つものであった。同じ高校同士でも状況は全く違う中で奮闘されている生の声をお聞きするのは大変に勇気づけられたし、小学校・中学校・高校・特別支援だけではなく、行政で、あるいは民間で等、普通に過ごしていてはなかなか関われない方の取り組みを聞くことが出来たことに非常にありがたかった。それだけではなく、ストレートマスターの方の初々しくも地に足のついた試行錯誤の取り組みをお聞きすることは、自分に対しての叱咤激励のような刺激をいただいていた。

「コミュニティ　オブ　プラクティス」ではあらためて「コミュニティ」の大切さに気づかせて頂いた。単なる兼業主婦の私にとっては、大学の図書館で缶詰にされなければ、絶対に読み終えることはなかっただろう。これも得がたい経験である。あと１年、自校の「探究的な学び」を組織していく立場を継続できたなら、コミュニティづくりを継続して行っていきたい。

最後に、福井大学連合教職大学院での学びを修了される皆様。カンファレンスや実践記録報告での学びを本当にありがとうございました。昨年の夏や今年の冬のカンファレンスでは「2 年目は本当につらいよ。」とのお言葉をいただきましたが、先生方の勇姿を胸に頑張っていきますので、この福井大学連合教職大学院でできたつながりはそのままにお願いいたします。ありがとうございました。

1年を振り返って

福井県教育総合研究所　坪川 美穂

私が教職大学院に入学しようと思ったのは、教育総合研究所教育相談センターの研究を進めていく中で、自分のマネジメント力を向上させる必要性を感じたからである。教育相談センターでは、平成２８年度より県内の中学校にピア・サポート活動を柱としたプログラムを提供してきた。このプログラムは、仲間同士の認め合いや支え合いを通して、思いやりのある子どもたちを育て、思いやりのある学校風土をつくることを目指すものである。これまでプログラム実践に申し込みのあった学校に携わる中で、先生方がピア・サポートについて共通理解し、意図的・計画的にプログラムを教育活動の中に取り入れ実践していくことがプログラムの実効性を高めるために大切であり、そのサポートをしていくことが研究所の役割であることが明確になっていった。そして、自分にマネジメント力がなければ、そのようなサポートは出来ないと思い、教職大学院で学ぶことを決意した。

今年度はプログラムを普及させる手立てを構築することを目的とし、「指導案とプレゼンテーション資料とワークシートがあれば、所員が入らなくてもプログラムの授業実施が可能である」という仮説のもと、研究協力校において実践研究を行ってきた。教職大学院入学当初は、実践研究を行うにあたって、研究協力校との協働や教育相談センターの所員との協働についてしか考えていなかったが、カンフ

ァレンスやラウンドテーブル、集中講義に参加し、いろいろな方とセッションを繰り返したり書物をじっくりと読んだり実践をまとめていったりする中で、研究所全体の所員との協働や他機関との協働などといったことも意識しながら実践研究を進めるようになっていった。

来年度より、ピア・サポート活動を柱としたプログラムは、福井県版ポジティブ教育プログラムの１つとなる。福井県版ポジティブ教育プログラムは、児童生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を学校教育において育てることで、「持続可能な幸福を育む学校づくり」を指すとともに、児童生徒の自己有用感や集団への適応感を高めることを目的としている。

これまでの実践研究で得た知見、教職大学院での学びを生かして、福井県版ポジティブ教育プログラムの実践に取り組んでいきたい。また、来年度は、チーム支援の主担当をすることとなった。まだ自分の中ではっきりとした構想はないが、「すべての子どものために」を合言葉に取り組んでいきたい。

最後になりましたが、修了生の皆様、御修了おめでとうございます。自分の実践や思いをうまく語れず、非常に分かりづらい私の話を、いつも根気強くじっくりと聴いていただき、ありがとうございました。皆様からいただいた感想やアドバイスを忘れず、これからも学び続けていきます。皆様の今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

１年間を振り返って

福井市明倫中学校　前田　朋子

１年前、教職大学院入学に合格したものの、不安がいっぱいだった。2 月の福井大学ラウンドテーブルに初めて参加し、ポスターセッション等自分はできるのだろうかと心配になった。しかしこの１年間は違った校種の先生とも知り合いにもなり、今までとは違った世界や考えを知り、充実した１年間であった。

グループセッションではＭ２の先生から、毎回貴重なアドバイスをいただいた。自分の取組をみつめ直すきっかけを与えてくださった。特に今でも心に残っているのは、12 月冬期集中講座で、3 日間の報告となるグループセッションでのＩ先生の言葉である。それは「前田先生が今、話したなかにあった、研究主任としてカチンときたこと（腹が立ったこと）をぜひ、長期実践報告に書いてほしい。」といった言葉である。これまでの自分の発表は表面的なことにしか目を向けていなかったのではないか、自分にとって見たくない部分、考えたくないことから目を背けていたのではないか･･･。Ｉ先生の言葉をきっかけに、自分の内面をしっかりと振り返り、それを自分の実践に活かしたいと思った。

教職大学院で初めて会った先生と毎回のカンファレンスで情報交換をしたり雑談をしたりするなかでも、いろいろな考えを知ることができた。またその後同じグループになった先生と県外出張で偶然お会いしたこともあり、みんな学んでいるのだなと刺激になった。

そして、いろんな不安を解消してくれたのは、M2 の高校時代のクラスメートである。何かわからないことがあると連絡したが、すぐに返事をくれた。夏期集中講座も一緒に図書館でレポート作成した。二人とも集中して原稿をパソコンでレポートを作成しているのは、昔のよきライバルに戻ったようでもあった。昼食は大学生協食堂でとり、お互いの学校の情報交換もできた。学校での自分の悩みも聞いてもらい、なぜだかまた頑張ろうという気持ちになったこともあった。冬期集中講座では、来年の長期実践報告の作成については、アドバイスもくれた。生徒と同じでやはり私も一緒に学ぶ、悩みを聞いてくれる仲間、先輩がいるのはありがたいと感じた。

本年度は「組織的・協働的な校内研究をめざして」を教職大学院での研究テーマとし、研究主任としていろいろな取組を行ってきた。来年度（令和２年度）は研究主任を若手に引き継ぐことになると思う。研究主任の仕事の内容を伝えていくだけでなく、自分がうまくいかなかった経験も伝えていきたい。そして、本校がこれまで取り組んできた主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、組織的・協働的そして継続的な校内研究になるよう、自分なりに考えていきたいと思う。私自身は来年度（令和２年度）、他の校務分掌になると思うが、組織的・協働的な取組になるよう、教職大学院でこの一年間で学んだ同僚との対話の大切さを活かしていきたい。

また、大学院で学ぶことに配慮してくださる管理職の先生や同僚の先生への感謝の気持ちを忘れずにいたいと思う。

Ｍ２の先生方には、いろんな面でお世話になった。これからもこのつながりを大切にしていきたいと思う。そして４月に出会う先生たちと、また新たなことを学んでいきたい。

1年目を振り返って

敦賀市立松原小学校　向山　博昭

2019 年 4 月、「教職大学院で何を学べばいいのだろう」「教職大学院での学びを学校に生かせるのだろうか」など、さまざまな迷いの中で今年度がスタートした。

教師となり 29 年。教職大学院で、教師としての自分の歩みを初めて振り返る機会を得た。これまで、さまざまな人と出会い、子どもたちや先輩、同僚から学び、いろいろな経験を積み、今の自分があることをしみじみと感じている。

これまでの自分の歩みを振り返り、問い直したとき、さまざまな人や経験がつながっていることに改めて気づいた。出会った先輩、同僚からは教育観や仕事に対する姿勢、子どもと向き合う情熱、学級経営や授業づくり、保護者や地域の方からは学校に対する見方や考え方、そして、子どもたちとの関わりの中で多くのことを学んできた。これらの経験や知識などがつながり、現在の自分がある。教職大学院での学びを通して、現任校においても、教員同士をつなぐこと、子どもたちや家庭・地域とつながることをさらに意識するようになった。

教職大学院のカンファレンスでは、毎回グループセッションが行われた。自分の実践を語り、グループの先生方の実践を聴き、大学院の先生やグループの先生方から多くのアドバイスをいただいた。教職大学院に入学してよかったと思うことは、地域や校種を問わず様々な方々に出会い、多様な考えに触れることができていることである。また、以前同じ職場で一緒に働いていた先生や高校時代にお世話になった先輩と縁あって再びここで出会えたことも、自分にとっては大きなことである。２年目も、いろいろな場面での出会いを大切にしていきたいと考えている。

昨年 11 月には福井大学教育学部附属義務教育学校の教育研究集会に、今年２月には奈良女子大学付属小学校の学習研究発表会に参加させていただいた。子どもたちがそれぞれの考えを持って意欲的に授業に参加し、臆することなく自分の思いを語る姿をたくさん見ることができた。それぞれの学校の力量のある指導者の様々な実践に出会うことで、現任校の研究や自分自身の実践をふり返り、見つめ直すことができた。

今、こうして教職大学院で学ぶことができているのも、現任校の校長先生をはじめ、先生方の協力があってのことである。いろいろな面で配慮や支援をしていただいていることを、本当にありがたく思っている。しかしながら、教職大学院での学びを現任校に還元する機会を、当初の計画ほど持つことができなかったことを反省している。２年目となる来年度こそ、これまで以上に積極的に還元したいと思っている。

修了生との学び

坂井市丸岡南中学校　山田　充

例年であれば慌ただしい年度末の今頃、今年は例年とは違う形で慌ただしく、気忙しく毎日を過ごしています。３年前に私自身と一緒に丸岡南中学校の仲間に加わった生徒たちが巣立つ今年の卒業式は例年以上に「泣ける」ものになるはずであったが、短縮された卒業式、見送りでもマスクをつけて言葉少なに別れることとなりました。教師として迎える卒業式は、巣立つ生徒が成長したことを実感する機会であり、私にとって「教師になってよかった」と感じるものです。「式ができただけよかった」「今年は仕方がない」と頭でわかっていながらも寂しく感じました。教職大学院での卒業式にあたる学位伝達式が中止されたことを知り、修了院生、そして大学の先生方の胸中を察するといたたまれない気持ちに

なりました。また、同時に開催される予定であった最終カンファレンスも中止となり、修学院生の先生方から学ぶ最後の機会を失ったことを大変残念に感じました。

学校改革マネジメントコースでの１年間の学びでは、修学院生の先生方を含めた院生の先生方、大学の先生方、数々の文献から多くのことを学ばせていただきました。これまで自分の実践を振り返る経験のなかった私にとって教職大学院のカンファレンス形式での学び合いはとても新鮮でした。異校種、異年齢、他県の先生など、これまであまり接点のなかった先生方と学び合うことが何よりの刺激となりました。また、カンファレンスの場で、違う環境にいる先生方に、自分の実践を説明することを通して、自分の実践について、自分自身や当時の自分の気持ちを再認識、再確認する機会となりました。カンファレンスを通して学んだことをレポートとしてまとめながら、省察を深めることができたように感じています。特に修学される先生方からは「この文献、今のうちに読んでおいた方がいいよ。」「自分はこの経験からこう考えるようになった。」等、知見に富んだご指摘や実践の流れを説明していただきました。また「私も不安でしたよ。大丈夫。」「夏の内にレポートをここまで進めておくといいよ。」等、１年前のご自身の様子からアドバイスをいただくこともありました。毎月のカンファレンスでは常に学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

私は次年度が最終年となります。まだ自分の研究の進め方、中心とすべき実践、まとめ方などについて先が見えず、不安な気持ちは変わりありませんが、教職大学院での学びで自分自身が成長すること、そして学んだ多くのことを他の先生方に還元できることを目指していきたいと思います。

スタッフ

紙上カンファレンスという発信

福井大学連合教職大学院　准教授　**荒木　良子**

最終カンファレンスは時間と空間を共有し、お互いの息づかいも真剣な表情も受け取りながら、修了生の方が編まれた長期実践報告書を、書き手その人の言葉による語り直しを通して、自分自身の言葉で編み直す時間でした。では、紙上カンファレンスでは何ができるのだろうと考えてみましたが、時間空間を越えたコミュニケーションなので、何ができるかは、発行された後に起きることだと思い至りました。いろんな方のいろんな言葉が飛び交い、いろんな方がそれぞれに受けとめられることでしょう。時には問い返したくなることもあるかも知れません。自問自答して心に深く留めていくこともあるかも知れません。長いスパンをもつコミュニケーションなのだと考えました。そうであるならば、わたしはわたしの発信をしよう、つまり、わたしが今年度、長期実践報告書を書いたならば、書きたかったことの一端をお伝えして、紙上による最終カンファレンスの発信としたいと思います。

わたしは特別支援教育に携わってきました。自分の教育実践をキーワード的に並べれば、視覚障がい教育、重複障がい教育、訪問教育、インクルーシブ教育（特別支援教育コーディネータ）の４つに特徴付けられます。すべてに通底する基本的な構えのようなものがあります。障がい観、児童観、発達観、教育的な理念などでしょうか。梅津(1977) から「あしば」と言うことにします。これらは最初に理論書から学んだものでもなく、ただ、ひたすら目の前の子どもたちとの日々から作り上げたものでもなく、両方が往還して、常に革められ続けたものだと再認識しました。それは優れた実践者、研究者から見れば愚直な歩みですが、わたし自身の足でわたしのペースで歩まなければ、自分の「あしば」にはならない、と、今更ながらに気づき直しました。

インクルーシブ教育を例に挙げます。盲学校の教員として地域の保育園で育つ視覚障害幼児の教育相談に出かけるようになった頃のことです。当初は「見

えない」ことの意味、それに伴う不自由不便についてお伝えし、先生方と共に係わり方を考える仕事だと思っておりました。しかし、保育現場に出向いてわかったことは、視覚障がいを前提とした盲学校で捉えた「見えないこと」ではなく、通常の保育現場での具体に即して「見えないこと」の意味を捉え、お伝えし、先生方の保育を肯定的に励ますことだと知りました。さらに、「見えない」ことも含めて保育集団としてすべての子どもたちの育ちを考えていく必要があるということに気づき、保育の在り方そのものを先生方と検討していくことになりました。それは簡単なことではなく、保育士さんもわたしも悩み、正解のない問いに向かって歩み続ける日々でした。一方、視覚障がいの専門機関として盲学校という場の持つ専門性にも気づく事ができました。日本型のインクルーシブ教育について連続性のある多様な学びの場の保障ということが言われますが、視覚障がいのある子どもが育つためには地域と、盲学校と両方があってそれが子どもの中で繋がっていることに意味があると経験を通して理解していきました。子どもたちの成長に添って小学校、中学校と出向く相談先がひろがり、その時々の現場情勢に向き合う度に「あしば」は常に革め続けられました。

自分の教育実践はこれでいいのか、考え方は間違っていないかという「あしば」の確定は、視覚障害教育の仲間たち、障がい児教育の仲間たちと続けることができました。盲学校は福井県には１校だけですが、幸いにして近隣の県には優れた先達がいて学び合う機会を持つことができました。教材や教育方法などの具体的なことを教えてもらうだけではなく、盲学校の在り方、教育相談の意義など基本的な考え方を確かめる機会として貴重な場でした。大学や大学院の特別支援教育ゼミに潜り込み、常に自分の実践との往還という方法で理論書の検討をする機会にも恵まれました。また、ラウンドテーブルを実践報告の機会としました。実践の具体だけが伝わると「教育の原点」という言葉で片付けられたり、居眠りやよそ見をされたりすることになりがちで、実践の具体から「あしば」までを通した報告をしたいと取り組んでみました。しかし、力及ばず玉砕の連続でした。「あしば」が弱かったんだろうと思います。

もし、わたしが今年度、長期実践報告書を書いたら、実践について当時の省察と、現時点での問い直しを重ね、自分の「あしば」が革められ続けた過程を振り返り、今の自分の「あしば」を確かにしたいです。そして、それが足踏みしそうな今の自分への叱咤激励になるだろうと思うのです。

修了生の皆様の今後の御活躍を心より祈念しております。

梅津八三　1997「各種障害事例における自成信号系活動の促進と構成信号系活動の形成に関する研究－とくに盲ろう二重障害事例について－」教育心理学年報第 17 集, 101-104 日本教育心理学会

大学院での学びを活かして

福井大学連合教職大学院　客員教授　**小和田　和義**

福井大学教職大学院修了生の皆さん、大学院修了おめでとうございます。皆さんは大学院に入学してから、それまでの自身の実践をじっくりと振り返り省察するとともに、新たな研究テーマを設定し、その目標を達成するために幾多の実践を積み重ねてこられました。

実践の振り返りでは、最初に、今までの自分自身の人生の中で節目（転機）となった事象や、印象に残っている事象に焦点を当てて自分なりの分析をされました。そして、そのことについていろいろな場面で先生方や院生の皆さんと対話をしていく中で、多角的・多面的な視点を学び、理論の裏付けなどを得て、考察を深めてこられました。そうした活動を通して、自身のメンタル・モデルに気づき、それを理解した上での対応を考え、実践するようになってこられたと思います。

また、院生としての研究テーマに基づいた実践では、皆さん、それぞれの学校等の実態と課題をよく把握したうえでテーマを設けており、チームとして改善に向けて、一歩ずつ丁寧に段階を踏んで取り組んできた姿が分かり易く述べられていました。その記録は、後に続く者への貴重な財産になると思います。

皆さんは、教職大学院で単に知識だけでなく応用力を身に付けられました。これからの学校運営では、今回の新型コロナウイルス対策でも見られるように、今まで先人が経験したことのないような対応を迅速に求められる事が多くなると考えられます。

学校を取り巻く環境が世界規模で目まぐるしく変化する中で、皆さんがこの大学院で身に付けた応用力は、きっとこれからの教員生活に役立つと確信しています。

また、大学院での出会いを大切にしてください。ここでの出会いはこれから教員生活を送っていくうえでの貴重な財産になります。皆さんが協力し合いながら、これからの教育界でご活躍されることをお祈り申し上げます。

柔らかな強さを持ち、学び続ける

福井大学連合教職大学院　客員教授／福井大学教育学部附属幼稚園　副園長

斎藤　弘子

新型コロナウイルス感染症対策で一堂に会することができなくなった令和元年度の終わり。今、改めて「これからの教育の在り方」を考えさせられます。「自分にとって未知の世界を一つずつ拓いていく子どもたちをどう育てていくのか」と考え悩み、他者と語り合いながら、子どもとともに学び続ける。その「柔らかな強さ」を持つ教員自身の資質・能力が問われ求められる時代となりました。

幼児教育の世界で、子どもの姿を拾い続けていると、何気ない日常に、幼児期なりの未来を拓く学びがあふれていることに気付かされます。感覚的に対象の本質を感じ、自らの願いや目標に向かっていく小さな積み重ねがあるのです。保育の一コマを振り返り、教職大学院を修了される皆様にご紹介したいと思います。

６月、梅雨の「雨とり」を楽しむ４歳児たちの姿をみつけました。

「雨とり、楽しいね」と友達同士言葉を交わしながら、軒下で、透明の丸いカップを空に向かって差し出します。雨の滴が溜まるのが嬉しくて、思いきり腕を伸ばしています。

一度保育室に戻った後、持っているカップを変えて、再び登場しました。「こっちの方がとれるよね」と言いながら、四角くて浅いカップを持っています。四角い形の広い口、厚みの浅いカップの方が雨を集められるような感じがして、いろいろな容器で試しているのです。

中庭の反対側では、テントのたるみを利用して、５歳児たちが雨を手で集めていました。４歳児たちは、空から降ってくる雨を集めるよりも、テントのたるみの方が一度にたくさん雨を集められると気付き、場所を移動して雨を集め出します。

子どもたちは、身のまわりにあるあらゆる対象を「遊び」にすることができます。季節を感じ、自然にふれ、遊びながら試し、「もっと楽しみたい」という願いを抱いて工夫していく力をもっているのです。

新しい出会いの驚きで目を見開き、集中して見つめ、何度も繰り返す姿。小さな音を聞き逃さないように耳をすまし、顔を近づけ、香りを感じようとする姿。何とか近づきたいとぐんと背伸びし、腕を伸ばしたりジャンプしたりする姿。あるときは指を丸めて大事そうにそっと持ち、あるときは力強く握りしめる姿。誰にも聞こえないような声でそっとつぶやいたり、友達との対話で思いを膨らませたりする姿。子どもたちは、出会ったあらゆる対象の素晴らしさや面白さ、不思議さを感じながら、自らの感覚をひらいていきます。時には様々な感情を味わい、近づいたり離れたりして、小さなチャレンジを繰り返しながら、様々な人・モノ・ことが好きになっていきます。教員は、子どもたちの姿から、ハッとして、ホッとして、いつも希望や夢を見出すことができます。

どんな時もあきらめず、教員同士で子どもの姿を語り合い、多様な新たな視点を取り入れながら、「柔らかな強さを持ち、学び続ける」プロセスを大切にしていきましょう。教育界に新たな風を吹かせてくださっている皆様に、心より御礼申し上げ、そして、益々のご活躍をお祈りしております。

『Professional Learning Communities』の形成に向けて、挑戦し続ける

福井大学連合教職大学院　准教授　血原　正純

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科（以下、本学連合教職大学院という）の教育課程を修了され、専門職学位として「教職修士(専門職)」を取得されましたこと、誠におめでとうございます。私事となりますが、2019 年 4 月に本学連合教職大学院へ出向となり、月間合同カンファレンスや長期集中講座、そして長期実践研究報告の読み手として関わらせていただきながら、私自身が多くのことを学ばせていただきました。

その中で、私がこの1年間最も強く感じたことは、「『Professional Learning Communities』をいかにして形成するのか、そして、どう成長させていくのか」を常に問い続ける必要性です。『Professional Learning Communities』とは、本学連合教職大学院の柳澤昌一研究科長によると『専門職としての教師の力量形成のためのコミュニティ』、稲垣忠彦氏によると『専門職として学び合うコミュニティ』などと解釈されています。授業研究・教職専門性開発コースの院生による木曜日の週間カンファレンス、すべての院生が参加する月間合同カンファレンスや長期集中講座、さらにはラウンドテーブル、それぞれの学びの場における語り合う・聴き合う様子はまさに、学び合うコミュニティそのものだと思います。

また、一人一人の学校拠点における長期の協働実践研究プロジェクトの課題は、探究する授業づくりであり、学び合う学級集団づくりであり、教員の協働研究のマネジメントであることから、『インターン校や勤務校における学び合うコミュニティをいかに形成するのか、そして、どう成長させていくのか』という問いは共通する部分ではないでしょうか。授業づくりや学級集団づくり、学校づくりでは子供同士のコミュニティ、教員同士のコミュニティ、保護者同士のコミュニティはもちろん、子供と教員のコミュニティ、保護者と教員のコミュニティもあり、学校を取り巻くコミュニティは多種多様です。一方、本学連合教職大学院におけるカンファレンス等でのコミュニティは、そこで学ぶ者の特別のものであり、そして『Professional Learning Communities』のあるべき姿の一つを示しているのではないでしょうか。そこで学んで身に付けた資質・能力は主体性、協働性、コミュニケーション力など数多く、本学連合教職大学院のコミュニティは教師の力量形成の場として、大いに機能していたと感じています。

さらに、本学連合教職大学院のコミュニティは、E.ウェンガーの『コミュニティ・オブ・プラクティス』の架橋理論に支えられ、実践コミュニティとして熱く息づいています。私は院生の皆さんとともに学び合う中で、次に示す実践コミュニティの展開をとらえる 7 つの視点『①進化を前提としたデザイン、②内部と外部のそれぞれの視点を取り入れる、③さまざまなレベルの参加を奨励する、④公と私のそれぞれのコミュニティ空間を作る、⑤価値に焦点をあてる、⑥親近感と刺激を組み合わせる、⑦コミュニティのリズムを生み出す』を痛感することもできたと思っています。

加えて、実践・省察・記録の実践研究サイクルは、一人一人が協働実践の展開を半期ごとに記録することによって、スパイラル的に繰り上げられ、『理論と実践の融合』が図られながら実践研究を深めることができたのではないでしょうか。そして最後に、2 年にわたる省察展望を長期実践研究報告書として冊子にまとめ、ラウンドテーブルで発信・交流することが新たな気づきや思い・考えを生み出すこととなり、専門職としての学び続ける教師へと導かれた経験は、修了生の皆さんの大きなキャリアになったことと考えます。

本学連合教職大学院では 4 月より新入生を迎え、それに呼応して私自身は新たな世代を交えて『Professional Learning Communities』の形成に向けた挑戦を再び始めます。そして、修了生の皆さんも新しい学校へ配属になったり新たなメンバーを迎えたりする中で、本学連合教職大学院での学びを活かして『Professional Learning Communities』の形成に向けた挑戦へ、主体的に取り組んでいただけると幸いです。

学校教育の牽引役としてご活躍を！

岐阜聖徳学園大学教育学部 教授 柘植 良雄

連合教職大学院のそれぞれのコースを修了され、学位を手にされた皆さん、誠におめでとうございます。私自身も皆さんとともに、月間合同カンファレンスやラウンドテーブル等で多くのことを学ばせていただきました。この２年間は新学習指導要領の移行期間（小学校）ということで、特に小学校勤務の先生方にとっては、各学校の新しい教育のあり方を模索する大切な時間であったと思います。私は実務家の教員で小中学校に勤務していた頃は、改訂のたびに各教科等の「指導書」（今の学習指導要領解説編）を買い揃え、職員全員で次の時代の教育の方向を学び合いました。県教委勤務の時や学校長の時には、自らが講師を任され文科省の説明を具体的に伝える役割を担いました。振り返りますと、学校の教員は学習指導要領の改訂によって、初めて世の中の変化を意識し、自らの指導のあり方を変えてきたように思います。そして、学校では地域の実態をもとに、ずいぶん思い切った新しい活動を計画・実践してきましたが、これらは国の考え方から逸れるようなことはありませんでした。考えの根底には、国の方向（学習指導要領）を常に意識していたのだと思います。また、これによって日本各地の教育レベルは維持されてきたのだと思いますが、これは日々利潤を追求する一般企業では考えられないことで、教育現場独特のものだと思います。

しかし、大学で教壇に立つようになって、この受け身的な考え方は一転しました。全国のいろいろな先生の様々な考え方や取り組みなど、多くの情報を得ることができるようになったからです。また、ネットに多くの情報が公開され、容易く得られるようになったことも理由の一つです。今回の改訂では、告示の前から各ワーキンググループや審議会の途中経過を探ることができ、大学の講義にも活用することができました。自身の長年の学校現場での歩みを改めて見直し、これからの教育のあるべき方向を自分なりに捉え、またそれを学生に伝えることでやりがいを感じられるようになりました。これは、教職大学院の学びである「省察」そのものだと思います。修了された現職教員の皆さんは、新しい教育の方向を理論と実践の往還を通して、自らの教育観を確立されたことでしょう。

教職大学院を修了された皆さんは、新しい学びの先駆者として、学校の中堅として、あるいは管理職として、職員との望ましい人間関係の中で学校現場の教育を牽引していただきたいものです。これからは、皆さんが積極的に声を上げ自らの実践で示すことで、学校教育は間違いなく変わっていくものと信じております。

皆さんのご活躍を期待しております。

教職大学院での学びを次につなげて

福井大学連合教職大学院 准教授 常廣 和美

教職大学院での 10 か月間、先生方の様々な実践とそこにこめられた熱い熱い思いをたくさん伺うことができました。伺いながら、自分自身の経験や考えてきたことと重ね、そこでもまた新たな気付きを得ることができました。私は３年前にこの教職大学院で学ばせていただいたのですが、そのときの出来事や考えを今改めて見直すと、また違った面が顔を覗かせます。後悔や反省はたくさんありますが、「あの状況で、あのメンバーだったからこそできたこと」と思える宝物のようなものもあります。３年前の自分が、「考えたことの先にあるものをもう一度捉え直し」ていくことが自分には必要だと言っていました。なぜかというと、実践の山場を越えると自分はついついサボってしまうからです。そして、この２年間は、常に考える軸を持ち続け、どの方向に持っていくと良いのか、自分にブレや諦め、サボリの部分はないか、常に自分を見張っていた感じがします。実践する自分とそれを見張る自分がいつも行ったり来たりです。こんなことを意識できたのも、この教職大学院でしっかりと自分を見つめ直す機会があったからだと思っています。今、長期実践報告を終えられた先生方はほっとされるのと同時に、次のスタートを切ることになると思いますが、ここで見つけた新たな知と自分の姿がこれからを支

えてくれると思います。何年か経って、今の教職大学院で学んだ自分を振り返ったときに、どのようなことを考えるでしょう。そのときの自分を想像するのも楽しいかもしれません。

私は特別支援学校の経験しかありませんが、教職大学院で他県や県内各地の各校種の先生方の実践を伺うことができました。特別支援にこだわり、しがみついてきたつもりはなかったのですが、知らず知らずのうちに考えるフィールドが限定的になっていたことに気付きました。校種の異なる学校のことを知らずに、イメージすることすら出来ていなかったのです。この教職大学院を通じて、確実に自分の財産が増えていったことを実感できました。財産、それは先生方であり、先生方の実践であります。出会わせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。院生の先生方、どうもありがとうございました。

今、世界が、人類が、新型コロナウイルスと戦っています。これもまた、自分たちを見つめ直す絶好の機会にもなるのかな、とも思います。何かを見直す好機とすると、モチベーションが変わりますよね。これまでの生活を、当たり前を見直して、新たな発見がある、長期戦になる気配もあるこの戦い、学校の当たり前も見直していけると良いなぁと考えています。教職大学院の学びを礎に、より子どもたちが幸せになる方向に、それぞれの現場で考えを編んでいって、またどこかで互いに実践を語り合える日が来ることを楽しみにしています。教職大学院ご卒業、おめでとうございます。

今 想うこと

福井大学連合教職大学院　准教授　**栃川　正樹**

「修了生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。」本来は、直接お顔を見て、この言葉をお伝えするべきかと思います。しかし、新型コロナウイルスの影響で、やむなく令和元年度の学位記授与式及び最終カンファレンスの中止ということで、このニュースレターを通じて、門出のお祝いの言葉とさせていただいております。

さて、修了生の皆様にとって、日々の学校生活はもちろんのことですが、合同カンファレンス、ラウンドテーブル、夏季・冬季講座と様々な学びがあったかと思います。今、振り返ってみると、どのような思い出が残っていますか。

私も、皆様同様、平成 26 年度に本校の教職開発研究科を修了させていただいております。その当時の自身を振り返ってみると、本当にたくさんの先生方と出会うことができました。通常の学校生活の中では、お会いできない大学の先生方、行政の方、県外の先生方、校種の違う先生方、拠点校でのインターンシップで学んでいる若い先生方などいろいろな方々と対話できることが、毎回楽しみになっていました。そして、その先生方々とのつながりは、修了して５年以上経ちますが、今も結びついており、何物にもかえられない財産になっています。授業研究・教職専門性開発コース（ストレート）の院生にとっては、新採用時に、すでに多くの現場の先生と顔見知りになっていることは、大きな財産でしょう。

また、出会いといえば、経営書をはじめ、教職大学院に進学していなければ手にしないような本との巡り合いが、たくさんあったのではないでしょうか。私は、その本たちとの出会いのおかげで、現在でも教師の協働性を高めるヒントを得て、理論から実践へと結びつけています。現職の先生方は、現場で働きながら、院生との両立はなかなかハードだったかと思いますが、理論と実践を素早く往還できる上では、利点も多かったのではないでしょうか。

そして、何よりナラティブに長文を書き綴る長期実践研究報告書との格闘は、今となっては、いい思い出です。長期実践研究報告書を書き終わったばかりの修了生の皆様には、まだいい思い出とまではいっていないかも知れません。しかし、これまでを省察し、書き終えた報告書は、教員生活の岐路に立った時、その壁を乗り越える応援者になってくれることは間違いないと思います。たった５年の歳月の中でも、何度か自身の長期実践研究報告書を開いて読み返し、自分を奮い立たせて、日常生活に戻ることがありました。そういう意味でも、人脈と同様報告書は大きな財産になると思います。

最後になりますが、修了生の皆様が大学院で学んだこと、得たことを生かして、今後、ますますのご活躍されることをお祈り申し上げ、ご挨拶にかえさせていただきます。

修了生へのエール

福井大学連合教職大学院　客員教授　西川　満

教職大学院のご修了誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。ここでの多様な人々との対話を通して考え学んだ新たな知識やアイデアを現場でどんどん実行し、省察し、工夫し、さらなる実践へとチャレンジしていってください。

将棋棋士という職業があります。史上最年少の14歳2か月で棋士になった藤井聡太七段のことがよく話題にあがっています。藤井七段は2016年12月のデビュー戦から翌年の6月まで連続29回勝ち続けそれまでの連勝記録を見事に更新しました。スター棋士の誕生です。その後の活躍が気になりネットで放映される将棋番組をよく観るようになりました。

将棋に出会ったころは新聞の将棋欄を読むことが楽しみでした。プロの真剣勝負の一局が数手ずつに分割され、その数手の解説記事が連載されていたため、次の一手を考えながら翌日の新聞を心待ちにしていたものです。こういうことはここ数年で、劇的に変化しました。まず、対局の様子をインターネットを通してLIVEで見ることができるようになりました。さらに驚いたことに最近は、画面の上方に「評価値」なるものが　A7段　42%　対　58%　B5段　のように表示されるようになってきました。プロ棋士が長考を重ねて指した一手に対して、瞬時にコンピュータが形勢を評価し表示してくれるのです。

パソコンが個人で買えるようになったころ、将棋ソフトは弱くて初心者の相手が十分に務まっていました。むしろパソコンはインターネットを通して同好の士と将棋を指すことに役に立っていました。その後コンピュータの性能が格段に向上し、プログラミングの技術が飛躍的に進化して、このところアマチュアはもちろんプロ棋士でもほとんど勝てなくなってきました。コンピュータの情報処理能力は人間をはるかに凌いでいること、疲れを知らずほとんどミスをしないことから勝負にならなくなってしまっています。そういう状況で昨今はプロの棋士同士の対局のLIVE放送の画面にどちらがどの程度優勢なのかコンピュータが計算し瞬時に表示するわけです。プロ棋士も、若い人を中心に対局以外の場ではコンピュータの形勢評価値を参考にしてこれまでの定石にとらわれない新手を考えたり、作戦の幅を広げたりと活用するようになってきています。

現在はまだコンピュータ同士の将棋大会で常に勝ち続けるソフトができたという話は聞きません。どんな対戦相手にも必ず形勢判断で「100%」を出し続けるということはできないようです。将棋のゲームでは、絶対に真という理論はまだ見つかっておらず、本当に正しい手順は明らかになっていません。

さて、2台のコンピュータが対戦して何億通りの棋譜を創り出しても観戦する将棋ファンはまれでしょう。将棋は人間が二人で棋譜という一つのストーリーを創り語るゲームです。コンピュータ以上に人間はミスをします。ミスをする人間同士が、こう表現したいという大局的な意図をぶつけ合い、その関係性で新しい棋譜を、新しいストーリーを作り上げようとするところに、人々の心を引き付ける魅力があるように思えます。

ケネス・J・ガーゲンの「あなたへの社会構成主義」を読んでいて、メタファーという言葉に出会い、ふと思いついたストーリーです。一度手に取ってめくってみると面白いことが見つかるかもしれません。

修了に寄せて

福井大学連合教職大学院　教授　牧田　菊子

修了生の皆様　おめでとうございます。

私が皆様と本大学院で過ごした時間は1年間という短いものでしたが、振り返ってみるといろいろな場面での表情が鮮やかに浮かび上がってきます。

授業研究・教職専門性開発コースの皆様とは、木曜カンファレンスでの関わりがとても印象深いです。配属校での1週間の出来事の振り返る語りは、30年以上教員として内側から学校を見ていた私に

とってとても新鮮でした。理論と目の前の子ども達の実態と目指すところの狭間で葛藤しながら、教職員の一員として日々全力で取り組んでいる姿は、日々伸びようとしている子ども達の姿と重なりました。その時々の状況に応じて、メンター教員をはじめ関わるスタッフ達と情報を共有しながら的確な判断で臨機応変にその子・そのクラス・その学校に寄り添うことは、とても難しく、正解は１つには決まりません。だからこそ、迷い、悩みながら進めていくのですが、その時々のことを毎週木曜カンファレンスで振り返ることで、客観的に自分を見つめ、価値付け、軌道修正しながら次に向かうエネルギーにしていく皆さんの姿を大変頼もしく感じました。また、他の人の振り返りを自分事として聞き、共に考えることで自分の力にしていこうとする姿からは、チーム学校を支える一員として大へん力強い存在であることを確信しました。そして、私自身、その状況を当事者となって共に考え、学び合う貴重な機会をいただいたことに大変感謝しています。子どもたちの可能性を信じ、成長を願うが故に、どれだけ経験を重ねてもそこにゴールはなく、その時々で迷い、悩み、試行錯誤しながら学び続ける教員こそが伸びていく教員で、伸びていく教員こそが伸びていく子どもたちと共に学ぶことができるのだと改めて実感しました。

ミドルリーダー養成コースや学校改革マネジメントコースに所属されていた現場の先生方とは、各学校や月間カンファレンスで共有させていただいた時間がとても充実していて楽しかったことが感慨深く思い出されます。これまで私は福井市内の中学校での勤務が主でした。本大学院勤務となったことで、他市町の学校を訪問したり、様々な校種の先生方と語り合ったりできたことは、大変貴重な体験でした。特に、実践を通して成長していく子どもや教員や保護者の姿を、その過程で直面する様々な課題から目をそらすことなく丁寧に見取り、そのことを語ったり記録化したりされたことは、それを聞いたり読んだりした私自身に、過ぎ去ったことをあまり気にしていなかった自分のこれまでの歩みがとても場当たり的であったこと、それぞれのことは単独で存在するのではなくすべてつながっていること、そのつながりに目を向けることで新たなアイデアが生まれてくることを気づかせてくださいました。また、ご自身の学級や授業や組織運営を常に学校内外に開くことを基本として語られる実践は、特に、困難な状況に焦点が当てられ、結果も大切だけれどそこに至るプロセスを詳細に見取っていくことがとても重要だという熱いメッセージが込められていました。

長期実践研究報告が製本され、出来上がってきました。皆様はどのような気持ちでそのページを開かれるのでしょうか？今日のこの日を節目に本大学院を修了される皆様ですが、私は、残していただいたこの冊子を読み解くことでこれからも皆様と繋がっていられる幸せを感じています。

皆様のますますのご活躍とご発展をお祈りいたします。

学校組織マネジメントの ABCDE

福井大学連合教職大学院　客員教授　**松田　通彦**

今般、奇しくも VUCA（予測不能）の時代に勃発した新型コロナウィルス問題によって、予定されていた連合教職大学院の学位記伝達式及び最終カンファレンスを中止せざるを得なくなったことは誠に残念であるが、こうして修了生諸氏に餞のメッセージを送る機会が等しく与えられたことをむしろ前向きにとらえたいと考えている。

教職大学院に関わらせていただいて 10 年近くになるが、担当分野が教育行政マネジメントということでもあり、また、自身の来し方の経験から、組織マネジメントの在り方や考え方については、常に高い意識と関心を寄せてきたつもりである。この間、200 名を超える多くの院生諸氏と接してきたことになるが、将来、学校現場でスクールリーダーとしての活躍が期待される方々に対し、日頃の私の思いの一端を述べさせていただきたい。

組織というものをどう定義するかについては紙面の都合もあり割愛するが、組織が動く、人が動くことを周到に可能ならしめることが、組織マネジメントリーダーたる必要条件の１つであることに異論は多くないと確信している。では、先行き不安定で変化の激しいこの時代にあって、学校組織をマネジメントする際に留意しなければならないことは何なのであろうか。

周知のとおり、マネジメント（management）という言葉は、英語の manage という動詞の名詞形であるが、この言葉を英和辞書に出てくる「管理、統率」というような意味で一括りにすることには以前

から違和感を覚えていた。manage という動詞には、本来、「何とかやりくりする、うまく処理する」というニュアンスがあることを踏まえれば、リーダーの一方的な判断のもと集団やグループを既定の方針や行動で一絡げにすることではないはずだからである。むしろ、持てる智慧を総動員し試行錯誤を繰り返しながら、所属する組織やコミュニティを１つの方向に柔軟に定位づけることではないかとの思いを強くしている。

こうしたことから、自身の拙い実践に通底している理念として、「組織マネジメントの ABCDE」というオリジナル・フレーズがある。これらは、マネジメントリーダーに必須の行動理念として肝要と考えるキーワードに係る英語の頭文字であるが、簡単に紹介させていただきたい。

まずは、組織をマネジメントする際には、組織そのものがリーダーの力強い実行（Action）力によって動く、動かせないといけない。これには、もちろん組織の構成員である人を動かすことから、リーダーの人間力そのものが問われることになる。社会の変化、時代の変遷にともない、組織も人も変わらねばならない。何事につけ、同じ場所に安住することは決して生産的ではなく、むしろ退歩に等しいという考え方である。

次に、組織運営の心棒には、リーダーのバランス（Balance）感覚がなくてはならない。事の緩急に鑑み柔軟に対応できる能力でもある。崇高な教育哲学を有することは大切であるが、当面する想定外の課題に対し、臨機応変の判断が求められることは今後益々その頻度を加速化するであろうと思われる。そのためには、アンテナを高くしあらゆる情報を収集し、公正公平で偏りのないマネジメントが求められる。また、その際、ぶれない確固たる信念、自信（Confidence）が必要不可欠なのは言うまでもない。

更に、リーダー自らが、献身（Dedication）的に組織のため構成員のために、率先して努力・尽力することを怠ってはならない。これはある意味、「有言実行」「隗より始めよ」の行動様式にも通じるコンセプトであるが、指示はするが自分は動かない、饒舌に理論を語るものの実践が伴わないようなリーダーを信頼する人などいないのである。

最後は、対象が何であれ、組織が一定の目標や目的のもと課題解決に向けた実践活動に従事したのであれば、自ずとその成果、目に見える形での証拠（Evidence）が表出、表示されなければならないということである。結果が出なければダメということではなく、ゴールに向かうプロセスにも高い評価に値する実践があることを看過してはならないのは言うまでもない。当然のことながら、こうした取組みは、組織を取り巻く社会や地域住民へのアカウンタビリティに通じるものであるといえよう。

このようなフレーズを念頭に置いて、自分自身も組織マネジメントに係る実践を長年にわたり続けてきたつもりであるが、節目節目の省察から見えてくるものは、如何せん心もとないものが少なくない。忸怩たる思いも否定できない。定期的なカンファレンスや学校訪問の際、院生の皆さんの学びの下支えがどれほどできたか定かではないが、幾つかの長期実践研究報告書を紐解くと、何気なく発した自身の言葉の端々があちこちに引用されており恐縮の念を禁じ得ないのも事実である。

いずれにせよ、これからの学校教育の屋台骨となる修了生諸君の前に立ちはだかる課題や壁は、定年を過ぎた私の想像をはるかに超えるものがある。どうか、決してひるむことなくチャレンジ精神を忘れずに、教職大学院の学びの原点でもある協働性、同僚性と進取の気性に支えられた学校改革、授業研究への飽くなき探究を継続していただきたいと心から願う。令和元年度修了生各位の前途に幸多からんことを念じつつ、贈る言葉（エール）に代えさせていただきたい。

＜参考＞　松田通彦．「組織マネジメントリーダーの省察的教育実践」．（2015）．

マネジメントとは錬金術？

福井大学連合教職大学院　非常勤講師　**水野　幸郎**

「マネジメントとは何だろう？」この十数年、理論や手法を学んできましたが、もやもやした気持ちを持て余していました。最近、『学習する組織』の中に「錬金術は、最もありふれたもの（鉛）を最も価値あるもの（金）に変容させる」（348 頁）行為であるという記述を発見しました。学習するチーム

が組織を「学習する組織」に変容させるという文脈で語られています。マネジメントを一言で表す表現としての可能性を感じました。

ストレートマスターのみなさんとは木曜日の週間カンファレンスで話をする機会をいただきました。それぞれがよく考え、聴き、話す学びの場を共有することができました。振り返りの時間に、メンターとのかかわりや授業についての見方やデザインについて聞かせていただきました。昨秋、「メンターの先生の授業が、子どもたちの対話が中心で探求的なのです。」と聞いてどんな授業なのだろうと強くひかれました。指導主事訪問の日、非公開にもかかわらず突然の見学要請を快く受けていただけました。算数の授業は、教科書の絵を見て既習事項をもとに問題を作らせ、解けないものからその日の課題を設定します。見通しを持たせて個人で考えさせた後、１対１で説明しあい、そのあと全員の前で発表することで学びを深めるというスタイルでした。最後に振り返りを書かせる、主体的・対話的で深い学びの授業実践を体験できました。この授業を紹介し、ともに見てくれた院生に感謝します。

つながりにより新しい学びと出会うことができました。『学習する学校』の「学ぶことは深く個人的なものであると同時に、本質的に社会的なものだ。学びは抽象的な知識だけでなく人と人をつなぐ」（14 頁）ということばの意味を実感できました。教職大学院の学びの核心であることに気づき３年目を選択した院生が、最後に参加したカンファレンスで長期実践報告の内容を話すのを聞く機会を得ました。公教育の役割にまで考えを進め、「感性を表現するために選択の連続を体験させることで人格を形成することにつながる」授業を目指したいと報告していた。この話を聞き、コロナ禍で不確実性に対処できない状況が続いているが、自らこうした事態をどう捉え、どう行動するか判断できる子どもたちを育てくれるのだろうと期待します。

ミドルやマネジメントコースの現職の先生方と話していて気がついたことがあります。学校などにおいて、『学習する組織』で取り上げられている「深い学習サイクル（信念・前提、慣行、スキル・能力、関係、気づき・感性）」（408 頁）が機能していると感じました。このサイクルに働きかけて新学習指導要領により沿うように学校を変容させようとする取り組みを聞かせてもらうことで理論と実践が結びつきました。カリキュラムマネジメントによる「慣行」に働きかける実践は子どもたちの変容が見えるようでした。小学校の総合的な学習の時間のカリキュラムをデザインすることで主体的・対話的で深い学びの文化が定着することを目指されていました。地域と関わることで子どもたちの関係性の質が高まり、探求的な学びへと発展していく様子が物語れました。持続可能なコミュニティを目指すために学校に何ができるのだろうかと一緒に考えたのは楽しかった。カリキュラムをデザインしても、実践を始めると子どもたちの行動で変化させざるを得ない。自分で実践し、うまくいかなかったことも含めて共同で省察することでカリキュラムを共有することがカリキュラムマネジメントなのだと改めて確認させていただきました。

「関係」に働きかける実践を見守る機会を得たのも貴重な経験でした。実践コミュニティという場を作ることで教師の関係性に変化を与えていました。教科横断的な授業について考え、授業実践をし、みんなで共有し振り返ることを繰り返すことで、抽象的な知識を体験知に変容させていくナレッジマネジメントを見せていただきました。また、個人の試みとして授業でどのように考えたかを振り返らせ、文章化することで「学習としての評価」を試みていました。質の高い振り返りを共有することで、生徒は自分のものと比較して修正することで成長していく過程が視覚化できていました。挑戦し続ける姿勢を尊敬します。

院生の方々の話を聞いていると、鉛が金に変わっていくような気がしました。それぞれの場で、錬金術師として価値を創造していくことを期待します。

修了生への皆様へ

福井大学連合教職大学院　特命助教　矢内　琴江

修了おめでとうございます。

今回、最終カンファレンスで直接お会いして、皆様の再出発をともに祝うことが出来なかったことを大変残念に思っております。でも、教職大学院での2年間または3年間の学びが、次の新しい景色との出会いにむけた道行を支える希望となりますよう心から願っています。

私にとっては、福井に来てからの1年間をちょうど終えることになりました。手探りのような1年で、皆様のお役に立つようなことが出来たのか、大変心苦しく思います。研究者教員ということでこちらに来させていただき、まだ若手ではありますが、自分なりに学問とはどういうことかを考えると、知識を増やしたり正解を明らかにするのではなく、問い続け、その問いそのものに学ぶことなのではないかと考えています。カンファレンスで、ラウンドテーブルに、実践の意味を探るその言葉を聴くことの難しさも改めて感じました。同時に、問う人として関わりながら、実践を語る言葉を手にしていく貴重な姿に出会わせていただいたことを嬉しく思います。ありがとうございました。

こうした互いの実践を聴き合い、語り合う営みを経た長期実践記録は、省察し実践する専門職としての道行をより豊かにし、新たな景色を出会わせてくれるものとなると思います。この1年、福井に来てとくに大事だと思ったことは、様々な学校で、実践を書くという文化が展開されていることでした。今回書かれた長期実践記録の一つひとつが、またそれぞれの組織の、またその土地の文化をつくり、そして、それがまた新たな実践を育むのだろうと思います。

また、ラウンドテーブルなどで、共に実践の意味を探り問い合う者同士として、再び会えることを楽しみしています。

院生と共に学び合う3年間

福井大学連合教職大学院　特命助教　王　林鋒

特命助教として福井大学に赴任して3年間が経ちました。それまでに関東圏で、大学教育学部授業のアシスタント1年間、青少年教育研究センターの助手1年間、短大教育学講座の講師1年間、国際語学学校中国語講師3年間、といった教学経験を積み重ねていました。自分の教育経験を含め、日本・中国の両国において大学・大学院の組織及び大学生・大学院生を育成する課程と仕組みの違いに気づきました。福井に来てから、『学校拠点方式』という教職大学院の理念の下で、新しい大学院生との関わり方に出会いました。

福井大学教職大学院が2008年創立してから、教師の学びの場である学校ベースの実践コミュニティの創造を目指して、「学校拠点方式」を長期に亘って、実践して、教師教育を再構築してきました。「学校拠点方式」は、授業改革、教師自身の自己改革と学校の組織改革を同時に実現することができます（松木、2013）。学校の抱える課題を学校で同僚教師と協働して解決する学校改革のため、教育と研究、理論と実践、LocalとGlobalが一体となって展開する構造をもつ教職大学院となっています（同上）。従って、大学教員は、大学院生が所属する学校（組織）ごとに、異なる背景を持つ実務家教員と研究者教員を交えたチームを組んでサポートする支援体制を行っています。

授業研究・教職専門性開発コースの院生たちとの関わりは、週間・月間カンファレンスと公開授業の参観が中心です。カンファレンスでは、彼らの話から、こどもの見取り視点の充実さ、授業づくりへの熱意が伝わってきます。M1の公開授業では、板書を書くのに精一杯で子どもたちを全然見ていなかった院生が、M2になって、子どもたちとのやり取りをスムーズに進んで、立派な授業ぶりを示し、成長しました。長期インターンシップの狙いではありますが、院生たちはインターン校の実態や体制をよく知っています。日本での学校教育経験がない私は、いつも院生たちから、学校の詳しい情報や仕組みを教えてもらっています。「中国の国語では、どのよ

うに漢字、漢詩を教えているか？」、「中国の小学校では、英語をどのように学んでいるか？」といった質問を受けたことがあり、日本国内のみならず、海外の教育事情にも興味関心を持っています。

ミドルリーダー養成コース・学校改革マネジメントコースの現職院生たちとの関わりは、月間カンファレンス以外に、担当校への学校訪問がメインです。毎年 12 校を協働で担当していて、教員研究会、公開授業検討会/研究会、指導主事訪問研究集会、生徒発表会のため、週 3 日間学校訪問をする場合が少なくありません。担当チームの大学教員が学校に行く際、院生と話し合う時間をできるだけ確保しています。ある公開授業研究会の後、授業づくりに苦戦している若手教員たちの話を聞く機会を設けました。何人かの教員が溜まってきた辛さ、無力感を涙ながら語ってくれました。教科会がなく、お互いの気持ちや悩みを共有しなかったことが分かりました。学校や教員との信頼関係が形成しているから真意を語ってくれました。引き続き学校に出向く大切さを改めて実感しました。

「院生と共に学び合う」をタイトルにしましたが、院生からの学びが多かったことに間違いありません。その上に、１月下旬に中国が新型コロナウイルスの感染が深刻だった時期、日本の民間団体から届いた支援物資に添えた漢詩「山川異域　風月同天」、「豈曰無衣　与子同裳」が中国人の心を動かして、SNS で話題となり、大きな反響を呼んでいました。日本のある小学校が保護者への一通の手紙が中国のメディアが報道されました。「中国や武漢市という地域、そこにかかわりのある人々へのいわれなき差別発言等が懸念される。ご家庭におかれましては、お子さんとの語らいの中で、正しい人権意識が育つようご配慮願う」といったメッセージが日本の教育の素晴らしさが語っています。２月下旬から、日本国内での感染拡大を受け、中国が身につまされる思いで日本に検査キットやマスクに「相知在急難　独好亦何益」、「青山一道　風雨同舟」の漢詩を添えて、エールを送りました。７世紀から始まった遣唐使を通じて日本の文化に入った漢文・漢詩が現在に至っても、お互いの気持ちを込めて伝え合っています。前代未聞の危機に際して、改めて日中の文化的結びつきの深さが感じられ、一衣帯水の連帯感がさらに強まってきました。国際社会が協働で感染症との戦いを一日も早く勝ち抜くようにお祈りいたします。

引用文献

松木健一(2013)「学校拠点方式の教職大学院とは何か :学校ベースの実践コミュニティの創造を目指す福井大学の取組を振り返る」『教師教育研究』6, 3-18.

【 **編集後記** 】実施することができなかった 2019 年度最終カンファレンスの代替措置として、Newsletter 特集号を編むこととなりました。年度末のたいへん多忙な中、さらに短期間での依頼であったにも関わらず、原稿をお寄せいただきありがとうございます。大人数であるため、２号に分けて掲載します。また、新年度となりましたが、所属の表記は前年度で統一しておりますことご了承ください。

教職大学院 Newsletter　特集号 vol.1
2020.4.21 内報版発行
2020.5.2 公開版発行
編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp